能越自動車道関係
埋蔵文化財包蔵地調査報告

――小矢部市～福岡町間――

1993

財団法人　富山県文化振興財団
埋蔵文化財調査事務所

序

当調査事務所では、平成４年度から新たに能越自動車道建設地（小矢部～福岡間）の埋蔵文化財の発掘調査に着手いたしました。

ここに報告する調査は、当該自動車道幹線及びそのアクセス道建設地に係る埋蔵文化財包蔵地の範囲並びに遺構・遺物の遺存状況などの概要を把握するためのものであります。

本書は、その詳細を報告したもので、この調査の成果が、今後の遺跡の理解や研究の一助となるよう願うものであります。

今回の調査に当たり、格別のご協力とご配慮を戴いた関係機関及び関係各位に、心からお礼を申しあげます。

平成５年３月

財団法人　富山県文化振興財団
埋蔵文化財調査事務所
所　長　　桃野　真晃

例　　言

1．本書は、平成４年度に小矢部市～福岡町区間の能越自動車道及びそのアクセス道建設予定地内で実施した埋蔵文化財包蔵地の調査報告である。

2．調査は、富山県教育委員会の決定に基づき、財団法人富山県文化振興財団が建設省北陸地方建設局からの委託を受けて実施した。

3．調査事務局は、財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所に置き、調査第二係長宮田進一・同主事大房友明・中川靖夫が調査事務を担当し、調査第一係主任神保孝造・同文化財保護主事河西健二・佐賀和美・山本慎子が発掘調査担当、調査第一係長池野正男・同文化財保護主事谷杉廷子がそれに協力した。また、調査事務から発掘調査の全体に渡って所長桃野真晃・所長代理関　清が総括を行なった。

4．調査対象地・面積・発掘調査期間及び発掘調査担当者・調査員は次の通りである。

能越自動車道

ＮＥＪ－05(小矢部市五社地内、福岡町開酵・大滝地内) 約78,400㎡ 平成４年６月19日～７月７日
調査担当者　河西健二・山本慎子　調査員　神保孝造・佐賀和美・谷杉廷子

ＮＥＪ－06(福岡町江尻・蓑島地内) 約72,500㎡ 平成４年６月17日～６月29日
調査担当者　神保孝造・佐賀和美　調査員　谷杉廷子

ＮＥＪ－07(福岡町下老子・一歩二歩地内) 約74,800㎡ 平成４年６月１日～６月17日
調査担当者　神保孝造・佐賀和美　調査員　谷杉廷子

アクセス道

ＮＥＪ－Ａ－03(小矢部市木舟地内) 約32,600㎡ 平成４年６月16日～７月１日
調査担当者　河西健二・山本慎子　調査員　池野正男・神保孝造・佐賀和美・谷杉廷子

ＮＥＪ－Ａ－04(小矢部市芹川地内) 約19,400㎡ 平成４年６月15日～６月16日
調査担当者　河西健二・山本慎子　調査員　池野正男

5．本書の編集・執筆は、神保・河西・佐賀・山本が行い、執筆分担は文末に記した。また、資料の整理・図化・写真撮影・トレースは、各々が分担しこれに当たった。

6．調査期間中及び資料整理期間中、次の各機関・各氏からご指導・ご協力並びに有益な教示と助言を頂いた。記して感謝申し上げます。

富山県埋蔵文化財センター、小矢部市教育委員会、福岡町役場、小矢部市芹川自治会
福岡町木舟・開酵・大滝・矢部・蓑島・江尻・下老子・一歩二歩の各自治会、　上野章（富山県埋蔵文化財センター所長代理）、久々忠義（富山県埋蔵文化財センター調査課主任）、伊藤隆三（小矢部市教育委員会社会教育課文化財係長）

7．出土遺物及び記録資料は、当埋蔵文化財調査事務所が一括して一時保管している。

目　　次

序
例言
目次
Ⅰ．位置と環境……1
第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡……1
第２図　調査対象地と遺跡位置……2
Ⅱ．調査の経緯……3
表　試掘調査結果一覧表……3
Ⅲ．調査の概要……5
１．ＮＥＪ－Ａ－０３（石名田木舟遺跡）……5
(1)　概要……5
第３図　ＮＥＪ－Ａ－０３礫層分布図……5
第４図　７・８トレンチ層序模式図……6
第５図　７・８トレンチ遺構平面概略図……6
第６図　ＮＥＪ－Ａ－０３試掘トレンチの位置……7
(2)　遺物……9
第７図　石名田木舟遺跡出土遺物……9
(3)　小括……10
第８図　８トレンチ転ばし根太建物構造模式図……11
２．ＮＥＪ－Ａ－０４……12
(1)　概要……12
第９図　ＮＥＪ－Ａ－０４試掘トレンチの位置……12
３．ＮＥＪ－０５（開酵大滝遺跡）……13
(1)　概要……13
第10図　ＮＥＪ－０５礫層分布図……13
(2)　遺物……14
(3)　小括……14
第11図　開酵大滝遺跡出土遺物……14
第12図　ＮＥＪ－０５試掘トレンチの位置……15
４．ＮＥＪ－０６－ａ（江尻遺跡）……17
(1)　概要……17
(2)　遺物……17
(3)　小括……18
５．ＮＥＪ－０６－ｂ（蓑島遺跡）……18
(1)　概要……18
第13図　江尻・蓑島遺跡出土遺物……18
第14図　ＮＥＪ－０６試掘トレンチの位置……19
６．ＮＥＪ－０７（下老子遺跡）……21
(1)　概要……21
第15図　ＮＥＪ－０７地形概略図……22
第16図　ＮＥＪ－０７試掘トレンチの位置……23
(2)　遺物……25
第17図　下老子遺跡出土遺物……25
第18図　下老子遺跡出土遺物……26
第19図　下老子遺跡出土遺物……27
第20図　トレンチ別弥生土器の器種……28
(3)　小括……29
参考文献……30
写真図版

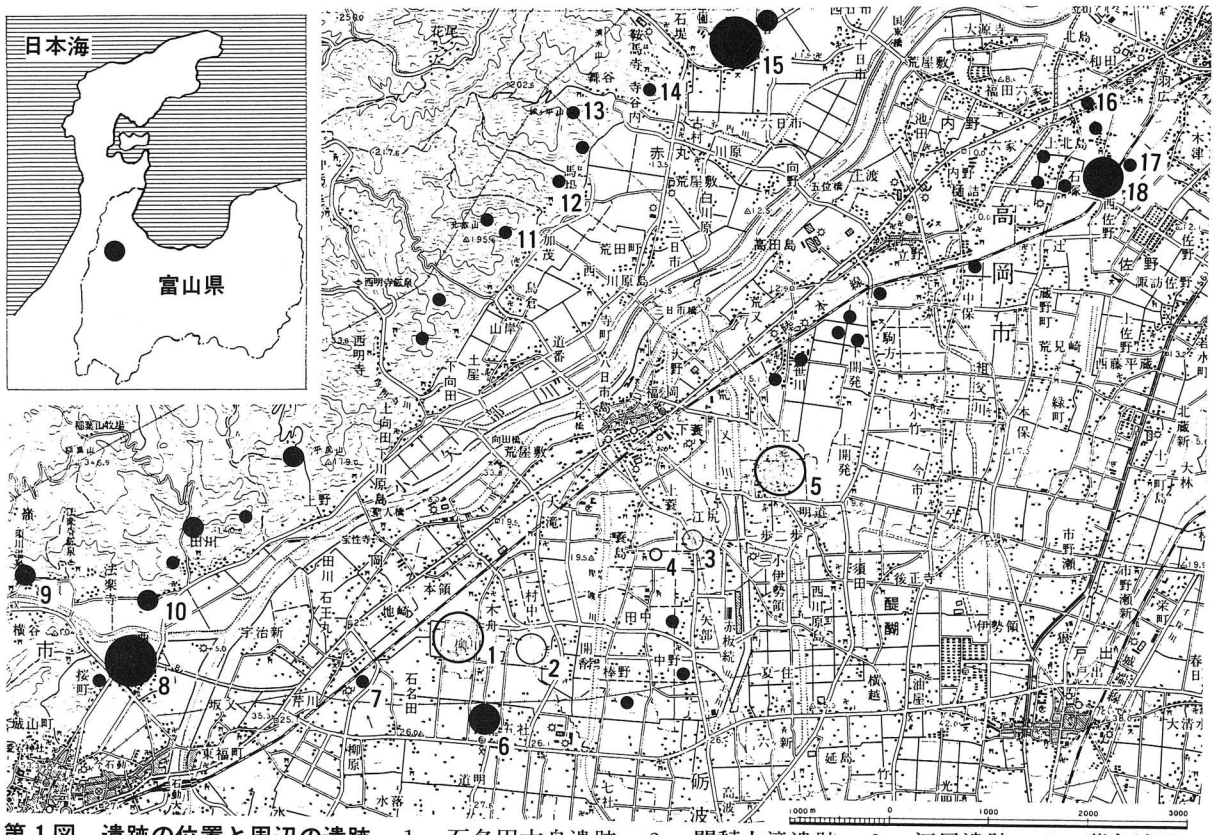
Ⅰ．位置と環境

富山県西部に広がる砺波平野は、屋敷林に囲まれた「散居村」で知られる。砺波平野は、庄川、小矢部川とその支流によってつくられた複合扇状地である。今回試掘調査を行なった小矢部市、福岡町はその扇端部にあたる。小矢部市北部には稲葉山を中心とする丘陵が広がっている。北東に進むにつれ高さを減じて、福岡町西部の宝達丘陵が連なり、高岡市へと通じる。丘陵沿いには、縄文から中世にかけての遺跡が発見されている。特に、山腹の斜面を利用した横穴や古墳が目だっている。また丘陵は急斜して南方の平野部につながり、小矢部川が北東に蛇行する。沖積活動によって幾度となく流路を変え、古くから人々に洪水・氾濫といった被害をもたらしてきた〔小幡　1967〕。これまで小矢部川右岸の平野部は、高岡市から福岡町境まで、石塚遺跡をはじめ縄文・弥生から中世までの遺跡が確認されていた。今回、福岡町でも遺跡を確認したことによって、小矢部川をはさんだ丘陵と平野部に遺跡が連なるといえる（第１図）。

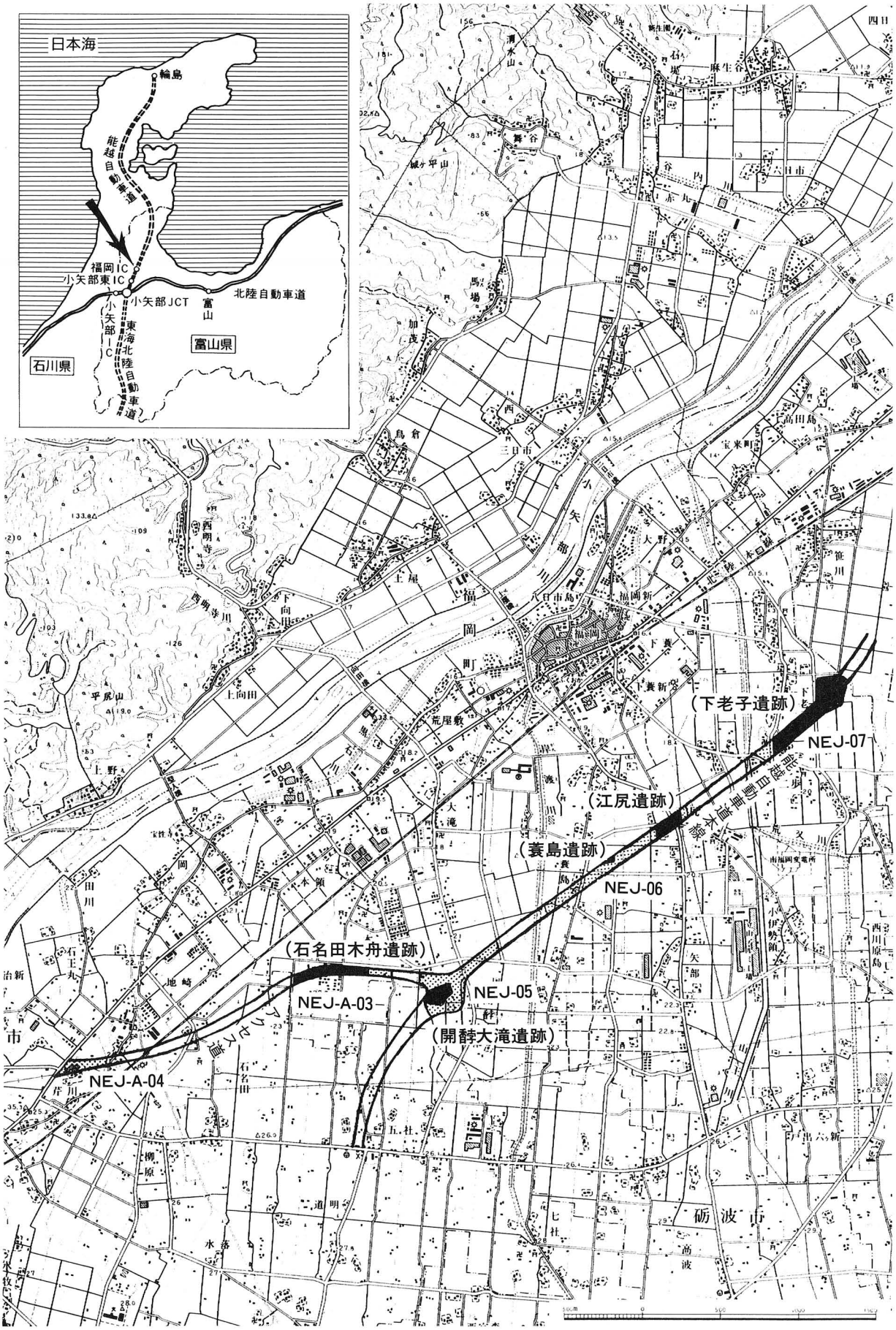
確認した遺跡は、能越自動車道の路線上、南西から北東に、石名田木舟、開蓚大滝、江尻、蓑島、下老子の５遺跡である。標高は、石名田木舟遺跡で21ｍ前後、下老子遺跡で18ｍ前後と北東に向かって緩やかに傾斜する。遺跡は岸渡川または荒又川流域の平地に立地する。この２河川は、庄川の小分流と自然湧水を集めたもので、等高線10ｍ内外の地帯を侵食していたといわれる〔小幡　1969〕。

一帯は、中世において皇室御領「糸岡庄」が所在していたといわれる。その拠点として、石黒氏が築いたといわれる木舟城跡が、石名田木舟遺跡の南に所在する。下老子遺跡の一歩二歩地内には「菩提樹の塚」がある。法筵寺の寺侍、浜木三郎左衛門が寺領をめぐって討死した場所といわれる。

（佐賀）



第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡　１．石名田木舟遺跡　２．開蓚大滝遺跡　３．江尻遺跡　４．蓑島遺跡　５．下老子遺跡　６．五社遺跡　７．地崎遺跡　８．桜町遺跡　９．桐ノ木谷遺跡　10．田川三角山西遺跡　11．加茂横穴群　12．馬場古墳群　13．城ケ平横穴群　14．赤丸城跡　15．赤丸浅井神社古墳　16．下北島遺跡　17．石名瀬Ｂ遺跡　18．石塚遺跡



第2図　調査対象地と遺跡の位置

II．調査の経緯

富山県西部と能登地域さらに三大都市圏との高速体系を確立するため、高規格幹線道路網計画の一環として、北陸自動車道・東海北陸自動車道と小矢部ジャンクションで接続する形で策定されたのが能越自動車道である。この工事構想・計画が、富山県教育委員会にもたらされたのは平成２年４月の事である。計画では小矢部ジャンクション側から工事に着手し、用地買収が済みしだい一定の区間を確保しながら北進し、関連するアクセス道も整備するものであった。早々、関係の建設省北陸地方建設局富山工事事務所・県教育委員会・小矢部市教育委員会の協議がなされ、用地買収の大半が完了した小矢部市域で、計画路線内の埋蔵文化財包蔵地の有無確認をするため分布調査を行なう事となった。

分布調査は、県教委が主体となり平成２年４月中頃、富山県埋蔵文化財センターと小矢部市教委によって実施され、新発見の６箇所の遺跡推定地が確認されるに至ったが、その後の関係機関の協議でさらに試掘調査を実施し、遺跡のより明確な範囲を確定する事が決定した。平成２年11月～12月下旬、これを受て小矢部市教委が試掘調査を行い、６箇所の推定地のうち３箇所で遺構・遺物を確認。平成３年２月の協議で報告され、五社、石名田、地崎の３遺跡が確定された〔小矢部市教委　1991〕。

一方、用地買収はその間も進められ、平成３年４月に建設省・県教委・当財団の協議がもたれた席上、小矢部市域で用買の遅れた芹川地内を含め福岡町木舟地内～下老子地内（第２図）の分布調査と試掘調査、さらに確定している遺跡の本調査委託先が打診された。会議の結果、分布調査は地元が了解しだい３年度中に県教委が行い、その試掘調査及び本調査を４年度以降、財団が実施する方向でまとまった。当該の分布調査は、能越自動車道本線内（福岡町開酔～下老子地内）22.6ha、国道８号線小矢部バイパスのアクセス内（小矢部市芹川・福岡町木舟地内）6.4haの計29haを対象に３年の12月

遺跡名	所在地	地目	発掘調査期間	面積	発見した遺構・遺物	時代	路線に係る遺跡の面積
NEJ－A－03（石名田木舟遺跡）	小矢部市 木舟地内	水田．宅地 道路　他	6／16～ 7／1（延べ5.5日間）	対象面積　約32,600㎡	遺構　竪穴住居跡．掘立柱建物．土坑．溝．杭列．礎石建物．根太敷建物．埋甕状土坑	◎古代 ◎中世(末) 近世	約 21,600㎡
				試掘面積　約2,100㎡	遺物　須恵器．土師器．珠洲．中国磁器 越前．中世土師器．瀬戸・美濃．越中瀬戸．唐津．近世陶磁器．曲物．木柱．板材．鉄製品		
NEJ－A－04	小矢部市 芹川地内	水田．宅地 道路　他	6／15～ 6／16（延べ1.5日間）	対象面積　約19,400㎡	遺構　なし		
				試掘面積　約900㎡	遺物　近世陶磁器		
NEJ－05（開酔大滝遺跡）	小矢部市 五社地内 福岡町 開酔・大滝地内	水田 道路　他	6／19～ 7／7（延べ11日間）	対象面積　約78,400㎡	遺構　掘立柱建物柱穴．土坑．井戸．溝．炭集中箇所	◎中世(末) 近世	約 25,300㎡
				試掘面積　約4,600㎡	遺物　中世土師器．珠洲．近世陶磁器．曲物		
NEJ－06－a（江尻遺跡）	福岡町 江尻地内	水田．宅地 道路　他	6／17～ 6／29（延べ７日間）	対象面積　約72,500㎡	遺構　掘立柱建物柱穴．土坑．溝．土器集中箇所	弥生(後～末) 中世 ◎近世	約 12,100㎡
					遺物　弥生土器．中世土師器．		
NEJ－06－b（蓑島遺跡）	福岡町 蓑島地内	水田		試掘面積　約2,900㎡	遺構　土坑．溝	◎縄文(晩) 近世	約 3,400㎡
					遺物　縄文土器．近世陶磁器		
NEJ－07（下老子遺跡）	福岡町 下老子．一歩 二歩地内	水田．畑地 宅地．道路 他	6／1～ 6／17（延べ12.5日間）	対象面積　約74,800㎡	遺構　竪穴住居跡．掘立柱建物．土坑．溝	◎弥生(後) ◎弥生(末) 古代 中世 ◎近世	約 68,500㎡
				試掘面積　約4,900㎡	遺物　弥生土器・石器．土師器．須恵器 中世土師器．珠洲．中国磁器．近世陶磁器．漆器．下駄．木柱．板材		
合計				対象面積　約277,700㎡			約130,900㎡
				試掘面積　約15,400㎡			

試掘調査結果一覧表（◎は主体をしめる時代）

トレンチ掘削作業状況

遺構・遺物確認作業状況

記録作業状況

始め、県埋蔵文化財センターによって実施された。その結果、本線内でＮＥＪ（能越自動車道の頭文字をとった遺跡の略称）－05・06・07を、アクセス内でＮＥＪ－Ａ（能越自動車道アクセスの頭文字をとった遺跡の略称）－03・04の5 箇所の遺跡推定地を新発見するに至り、平成４年１月始め、当財団を含めた関係機関の協議で結果報告され、さらに同17日の建設省・県教委・財団の３者の協議を経て今回の試掘調査に至った。

試掘調査は、遺跡推定対象範囲のうち未買収の宅地部分を除く面積の約５％を目安に、幅約２ｍのトレンチを10～20ｍ間隔で設定した。トレンチは重機で掘削し、遺物・遺構を確認しながら順次掘り下げ、次に人力で壁面・平面精査を行い遺構・地層の状況を確認して記録を取り、さらに平面測量を加えてトレンチ位置を確定した後、安全を期すため重機で埋め戻した。埋め戻し完了までの調査期間は、平成４年６月１日～８月８日まで及び、対象面積約 277,700㎡、総発掘面積約15,400㎡の調査となった（表）。

調査の結果としては、５箇所のうちＮＥＪ－05・07、ＮＥＪ－Ａ－03で各１、ＮＥＪ－06でａ・ｂ２箇所の計５箇所（総面積が約 130,900㎡）において遺構・遺物の広がりを確認し、事前に結果を県教委へ報告のうえ、平成４年９月17日の建設省・県教委・財団の３者協議で説明、石名田木舟（ＮＥＪ－Ａ－03）・開酵大滝（ＮＥＪ－05）・江尻（ＮＥＪ－06－ａ）・簑島（ＮＥＪ－06－ｂ）・下老子（ＮＥＪ－07）の各遺跡が確定した。　（神保）

トレンチ位置測量作業状況

埋め戻し作業状況

Ⅲ．調査の概要

1．ＮＥＪ－Ａ－０３（石名田木舟遺跡）

(1) 概要（第６図、図版１～５の上）

対象地区は木舟城跡の北方約 300ｍにあたり、地区の西側一部を除けば、礫層が隆起した微高地上に位置する(第３図)。標高は現況で西側22.3ｍ、中央21.6ｍ、東側22.0ｍであり、中央が最も低くなっている。地元の話ではちょうど中央部分は沼田で古来から水はけが悪く、現在公民館のある場所には圃場整備前まで前川と呼ばれる川があり、木舟神社辺りから湧水していたとのことである。また、対象区西側の南にあたる地域はかつては高段であり、圃場整備の際に多量の土器がでたといい、東側の一部には「勅使道路」と呼ばれる道が圃場整備前まであり、古くは幅5.5ｍないし7.3ｍもあったという〔木舟城保存会　1992〕。また、この道は途中で北折し、今回未調査の民家下を北上していたと聞いている。

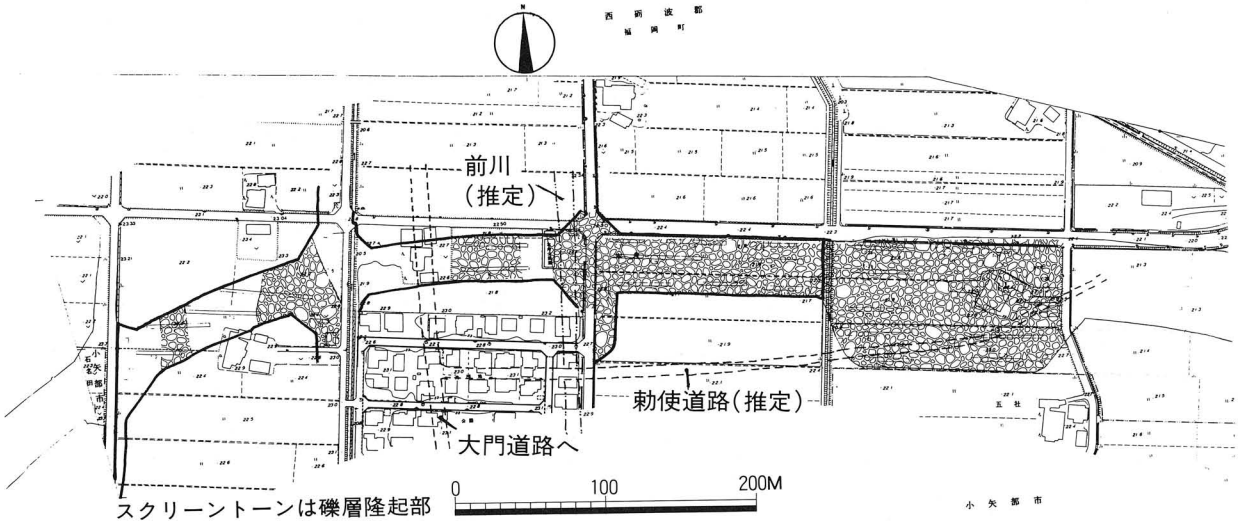
試掘トレンチは西側から１トレンチとし、東に向けて進み、途中民家・公民館の敷地で分断されながら計28本の調査を行った。以下、トレンチのまとまりごとに概観する。

地区の西部（１トレンチから６トレンチ）では古代の遺構・遺物が多く確認された。基本層序は１層（耕作土）暗褐色シルト、２層：灰褐色シルト、３層：炭を含む暗灰褐色粘土質シルトで古代の遺物は３層に主体がある。特に１トレンチでは２層と３層の間に中世の包含層と思われる暗褐色粘土質シルト（２ｂ層）が存在し、１層（15～25cm）、２層（10～15cm）、２ｂ層（２cm）、３層（15～25cm）となる。また、４・５・６トレンチでは圃場整備による削平のため１層（15～30cm）の直下に３層（０～５cm）があり、礫層となる。

遺構は１から４トレンチで３層土を埋土とした溝７条・土坑約40基が確認された。５トレンチでは西端に住居状の方形土坑と中央部に２基の埋め甕土坑がある。埋め甕は口縁を上にしたもので古代もしくは古墳時代のものと思われる。また、３トレンチ・４トレンチにかけて幅20ｍの谷状の落ち込みがみられた。これらから出土する遺物は８世紀から９世紀の須恵器・土師器が主体である。

また、４から６トレンチでは中世以降の遺構・遺物もみられる。遺構は溝を主体とし、遺物は１層及び３層上面から出土する。瀬戸美濃・唐津・越中瀬戸・伊万里などで中世末から近世に主体がある。

地区の中央部西側（７・８トレンチ)では中世末から近世の遺構・遺物が主体で、層序は１層（10～

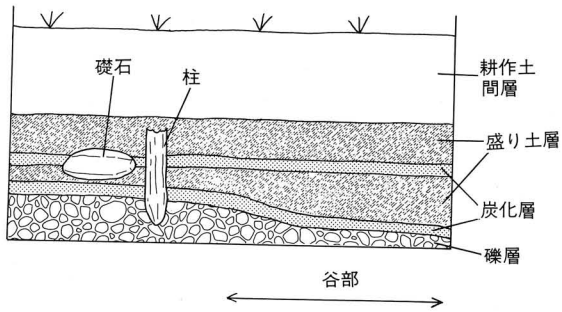


第3図　NEJ-A-03礫層分布図

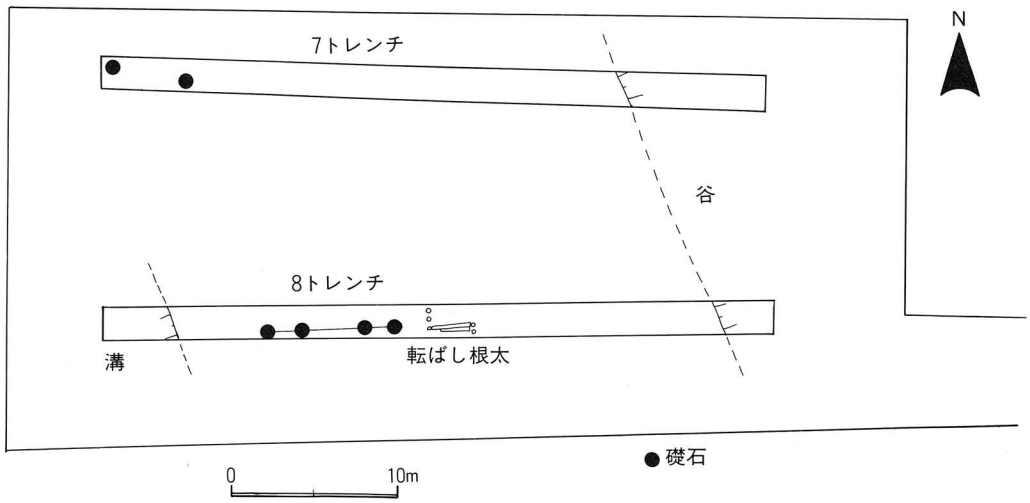
20cm）、２層(10～25cm)、３層(20cm)となり、その下は礫層である。遺物は３層中に主体があり、越-前・白磁・中国染め付け・瀬戸美濃・越中瀬戸・伊万里・木製品が出土する。３層は更に２枚の炭化面と２枚の盛り土整地面に分かれ、２時期の生活面を形成している（第4図)。炭化面は上下とも厚さ１～２cm程度で、７・８トレンチ全域にみられ、多くの炭化した木製品や木屑が含まれている。焼土はみられなかった。盛り土整地面はそれぞれ厚さ10cm程度で炭化面を覆うように盛られている。遺構は上層炭化面に属する礎石立建物（１ないし２棟）、転ばし根太をもつ建物１棟、しがらみをもつ溝などが検出された（第５図）。地元の人の話ではこの地に「禅寺」があったということで、その関連が興味深い。この遺構群の分布は７・８トレンチ付近に収まり、トレンチの東西は溝ないし谷状地形によって区画されるようである。

地区の中央部東側（９トレンチから19トレンチ）では中世から近世の遺構・遺物が主体となる。層序は１層（15～28cm）、２層（５～25cm）、３層（１～10cm）で、北側に行くにつれて圃場整備による破壊のため３層が薄くなる。遺物自体の量は少なく中世土師器・青磁・越前・近世陶磁器・木製品が出土した。遺構は10・11・15トレンチで直径１ｍ前後の柱穴、11トレンチで礫の充填された土坑や井戸、12トレンチで曲げ物の入った土坑や溝が検出されている。柱穴には柱が遺存したものが多くある。

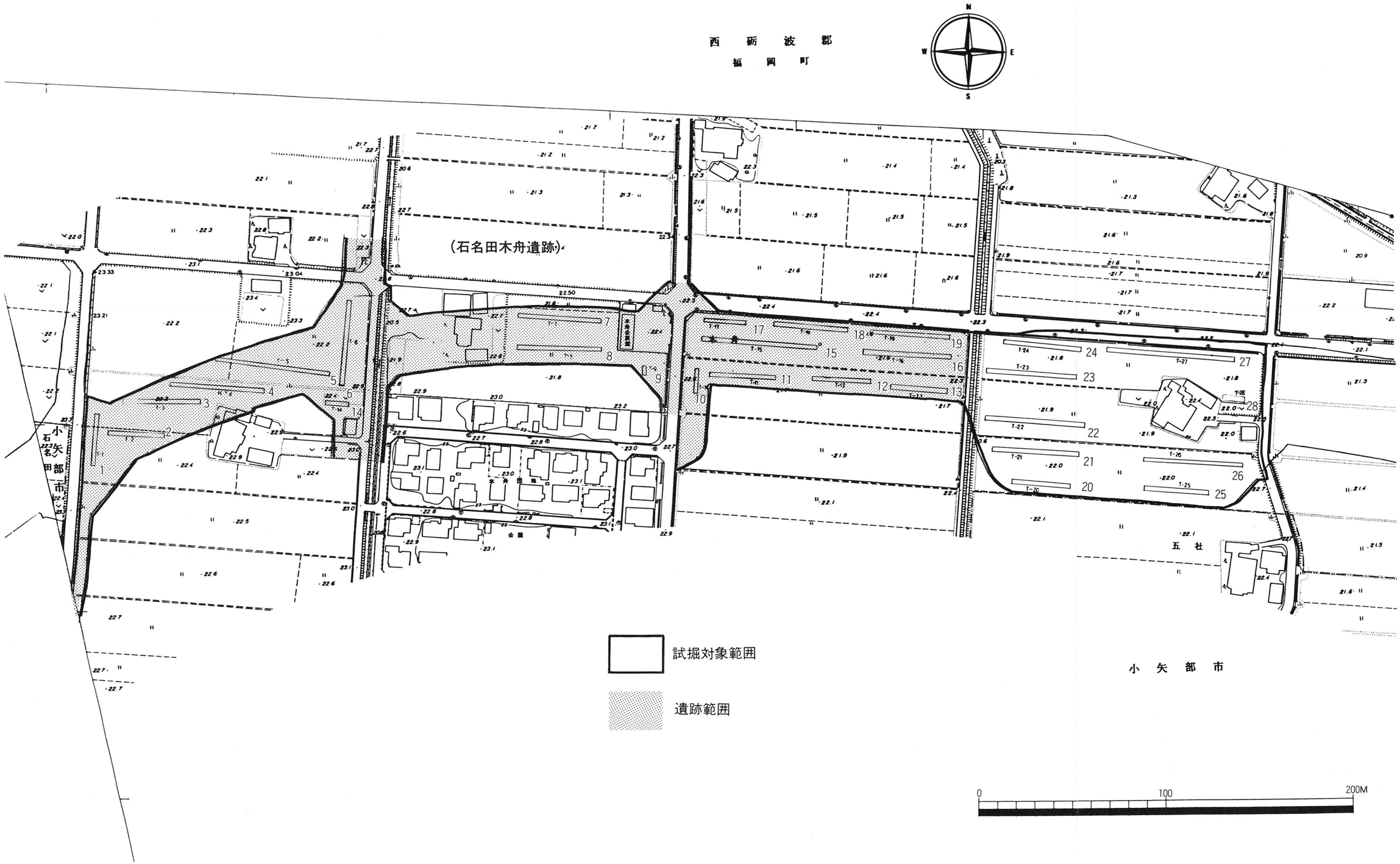
地区の東部（20トレンチから28トレンチ）ではほとんど礫層まで耕作土によって破壊されている。遺物は近世陶磁器が耕作土中から出土したのみである。なお、26トレンチでは脇を杭列で固めた幅３ｍほどの道状遺構が確認されたが、これが圃場整備前にあった「勅使道路」の痕跡であろう。しかし、削平がひどく近現代遺物しか出土しないことから遺跡の対象から外した。　（河西）



第4図　7･8トレンチ層序模式図



第5図　7･8トレンチ遺構平面概略図

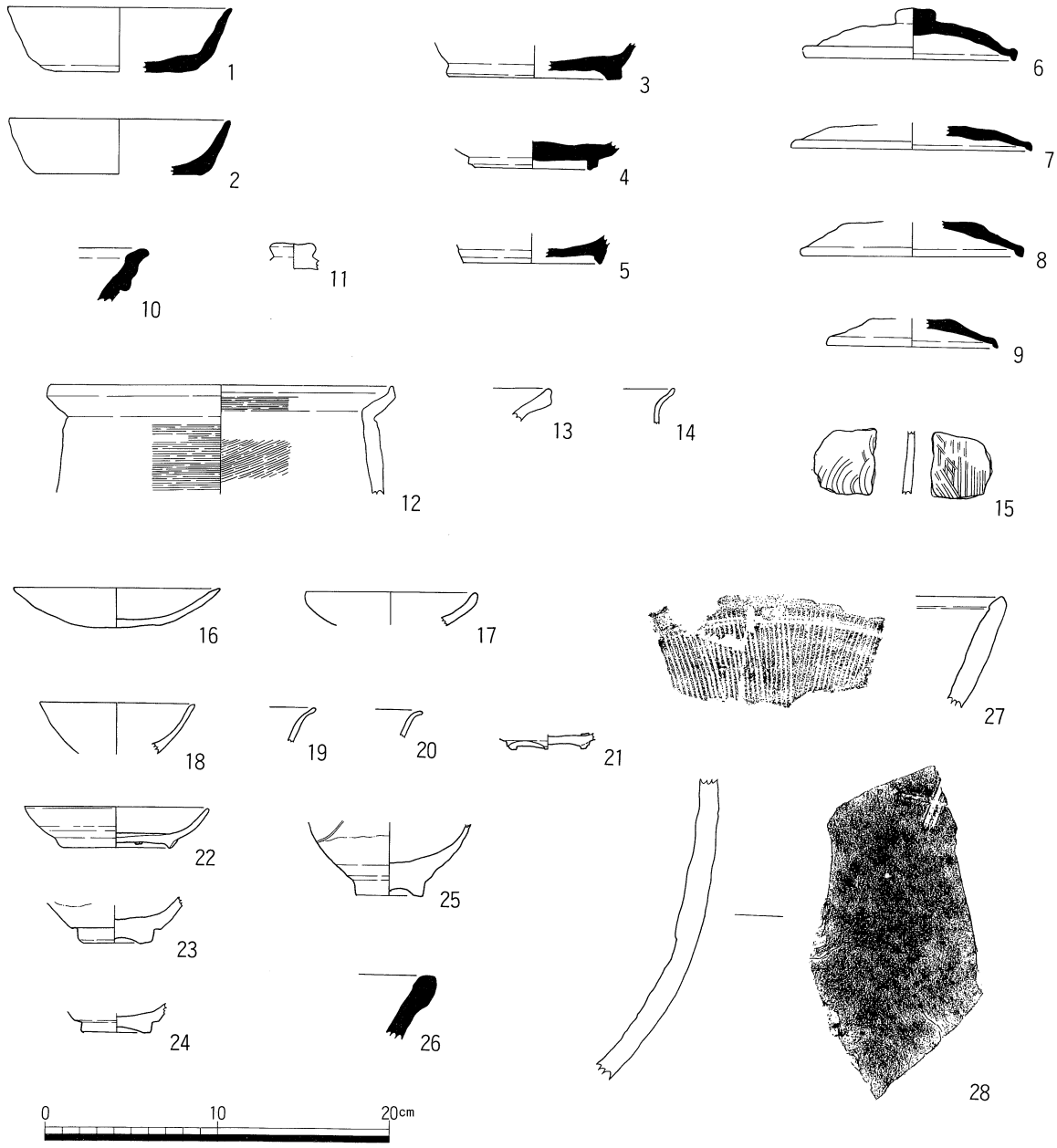


第6図　NEJ-A-03試掘トレンチの位置　1:2,000

(2) 遺物（第７図、図版５の下）

１トレンチから６トレンチでは、須恵器・土師器・内黒土師器、白磁・越前、越中瀬戸・唐津・伊万里、金属製品が出土した。このうち主体を占めるのは８世紀から９世紀の須恵器・土師器である。

１・２は須恵器無高台杯、３～５は高台付き杯である。６～９は、須恵器杯蓋である。頂部に回転篦切り痕を残すものと、回転篦削り調整を施すもの(7)がある。10は須恵器甕の口縁部である。外面に凸帯をもつ。11は、内黒土師器杯蓋で、外面は赤彩されている。12～15は、土師器長甕である。12は口縁端部を上方に引き上げ、内面に段が付く形態で、内外面にカキ目調整を施す。13は、端部を面取りする形態である。14は口径10cm程度の小型甕である。15は、外面に平行叩き、内面に同心円当て具痕が残る。長甕はこのほかに、内外面に縦・横方向のハケ目調整を施すものがある。17は中世土師皿で、口縁部に煤が付着する。21は白磁皿の底部である。内外面全面に施釉され、内面には胎土目が残



第7図　石名田木舟遺跡出土遺物　1:4

る。23・24は内反高台の瀬戸美濃椀である。23は外面に錆釉がかからず、内面には鉄釉がかかる。15世紀後半のものであろう。24は外面に錆釉が薄くかかり、内面には鉄釉がかかる。14世紀末から15世紀前半のものであろう。25は唐津の天目茶椀である。外面は錆釉の上から鉄釉が体部上半にかかり、長石釉による絵付けがなされている。17世紀前半のものであろう。

7・8トレンチでは、須恵器・土師器、白磁・中国染め付け・珠洲・越前・瀬戸美濃、越中瀬戸・伊万里、木製品、鉄製品が出土した。越前の数量の多さが目立つ。8は中世土師皿である。19・20は白磁椀である。22は16世紀の瀬戸美濃皿である。26は珠洲Ⅳ期の鉢である。27・28は越前甕である。28には刻文がある。

9トレンチから19トレンチでは、土師器1点、中世土師器3点・青磁1点・越前1点、唐津1点、伊万里1点を含む近世陶磁器数点、木製品、鉄製品が出土した。18は青磁椀である。

20トレンチから28トレンチでは、伊万里2点を含む近世陶磁器数点が出土した。

以下に、各トレンチごとの遺物を示す。

1トレンチ：7・11・15，2トレンチ：9・13，3トレンチ：3・8，4トレンチ：1・4・5・6・21・23・24・25，5トレンチ：2，6トレンチ：10・17，7トレンチ：19・20・27，8トレンチ：16・26・28・22，18トレンチ：15。（山本）

(3) 小括

遺跡の時期は奈良・平安時代と中世末から近世の二時期にわけられる。

A　奈良・平安時代　出土した遺物は8世紀から9世紀に主体があり、小矢部市内の遺跡範囲〔小矢部市教委　1991〕から東に延び、トレンチ6までが範囲としてとらえられる。明確な居住痕跡は確認できていないが、埋め甕土坑の存在などからある程度の定置集落であることが想像できる。

B　中世末から近世　遺跡の範囲は4トレンチから東の礫層が隆起した微高地上に位置する。南へ約300mの地点には天正13年の白山地震によって崩壊したという木舟城跡があり、当地区がその城下の範囲に含まれる可能性は大きい。地元の木舟城保存会発行の書籍によれば、木舟城へ通ずる南北方向の「大門道路」と北陸街道から分離し富山市に至る東西方向の「勅使道路」の交差する地点にちょうど7・8トレンチが相当する。更に7・8トレンチ地点には白山地震の影響で移転した「禅寺」があったという伝承を試掘調査時に地元の方から聞いている。その地点から礎石立建物が確認されたことは極めて興味深い。遺物は15世紀から17世紀に属する白磁・越前・瀬戸美濃・唐津が量的に多く出土しており、地震の年代とも適合する。その中で特に珠洲焼が極めて少なく、越前焼が多いのは珠洲焼の流通時期を考える点で面白い。

遺跡全体についてみると、遺物では7・8トレンチに限らず全般に16・17世紀の遺物が多くみられる。また、10・11・15トレンチで検出された柱穴の規模が1m近く、15世紀以降の柱穴の拡大という現象〔河西　1992〕を反映している可能性があるという点から、存続年代を中世末から近世としてとらえることができる。石黒氏・佐々氏・前田氏と城主を変えた戦乱期の木舟城下として機能していたのであろうか。

C　礎石立建物　7・8トレンチで確認された建物について若干考察を加えたい。7トレンチでは西端で2基の礎石が確認された。直径35cmほどの自然礫を用いたもので、上面は平坦で両者は約4.5m離れている。礎石上面が検出された時点では周囲に盛り土がみられ、上層炭化面はそれから若干掘り下げた面で現れる。正確な層序の確認を行っていないので、礎石が上層面に伴うのか、下層面に伴うのかは判然としないが、礎石の残存状態が良好なのと礎石の周囲を盛り土で固めた可能性もあること

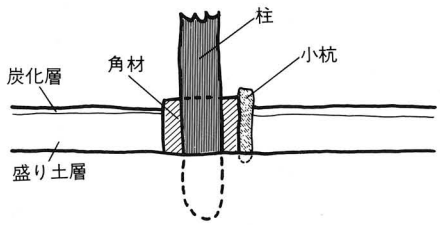
から現時点では上層に伴うものと考えておきたい。

８トレンチでは４基の礎石と角材を用いた転ばし根太建物が検出された。礎石は７トレンチのものとほぼ同一形態で西側に４基が直線に並んでいる。それぞれ1.8m、3.7m、2.3mの間隔をもち、上面は比較的平坦である。７トレンチのものとは15mほど離れており、別棟である可能性が高い。やはり礎石は盛り土によって埋められているようである。礎石列の東側延長上には、一辺10cm、長さ約２mの角材が検出されている。角材は途中から２本で構成され、その西端には角材と直行するように直径５～８cmの柱が３ないし４本並ぶ。柱は角材の東側にもみられるが、整然と並ぶものではない。更に面白いことに角材および柱の側には直径１cmほどの小杭がみられる。地面に数cmほどしか入らないため遺構として痕跡は残らないものである（第８図）。

細部についてみると、角材はほぼ直線で方形に面取りしてあり、ほぞ穴等の加工は確認できていない。長さは２mで建築物としては小規模であるため若干の疑問が残るが、いわゆる転ばし根太として認識できる。柱は丸材か角材なのか確認していないが、比較的しっかりとしたものである。掘り方面まで下げて確認していないので掘立柱なのか打ち込み柱なのか不明だが、太さなどから掘立柱である可能性が高い。小杭は気をつけなければ見過ごしてしまうため、正確なデータとしてとらえることができなかったが、おおよそ10cmおきに存在するようである。長さは10cmほどで角材がずれないためか、他の構造物を支えるためのもののように見受けられた。

総じて８トレンチの遺構は残存状態から上層炭化面に属するものと判断でき、礎石の上面は焼けたかのように見えるものもある。また、転ばし根太の上面、柱の上部および柱の芯部は炭化している。炭化面に焼土が見られなかったという疑問はあるものの、なんらかの原因で火災にあった可能性が高いといえよう。なお、柱の芯部のみ焼けているのは柱のその部分が地中に埋まっていた可能性を示すもので、整地盛り土のあり方が観察できる。また、礎石列と転ばし根太はほぼ直線上に並び、その同時性が窺われる。礎石と根太の距離は約２mであり、根太建物は礎石立建物の一部もしくは付属する小屋といった性格が考えられる。

最後に、県内における礎石立建物についてみると極めて例が限定されることに気づく。城関係では富山市白鳥城跡、寺院関連では福光町香城寺跡、立山町室堂跡でいずれも中世後半から近世に位置づけられる。少なくとも県内には礎石立建物の技術が中世代に導入されているが、一般には近世に入ってもすぐには導入されていないようである。県内の現存する礎石立古民家は18世紀まで下らなければならない。同時期の一般的な建物は柱穴規模の拡大した掘立柱建物や石列を伴う方形竪穴状土坑建物〔河西　1992〕として検出されているのみである。こういったことから７・８トレンチで確認された建物は特殊な立場におかれた構造物としてとらえることができ、この場合寺院関連の可能性が高い。また、転ばし根太建物については材が遺存していることから、当時の建築技術を知る上で重要である。今後の精細な調査と類例の増加が期待される。　（河西）



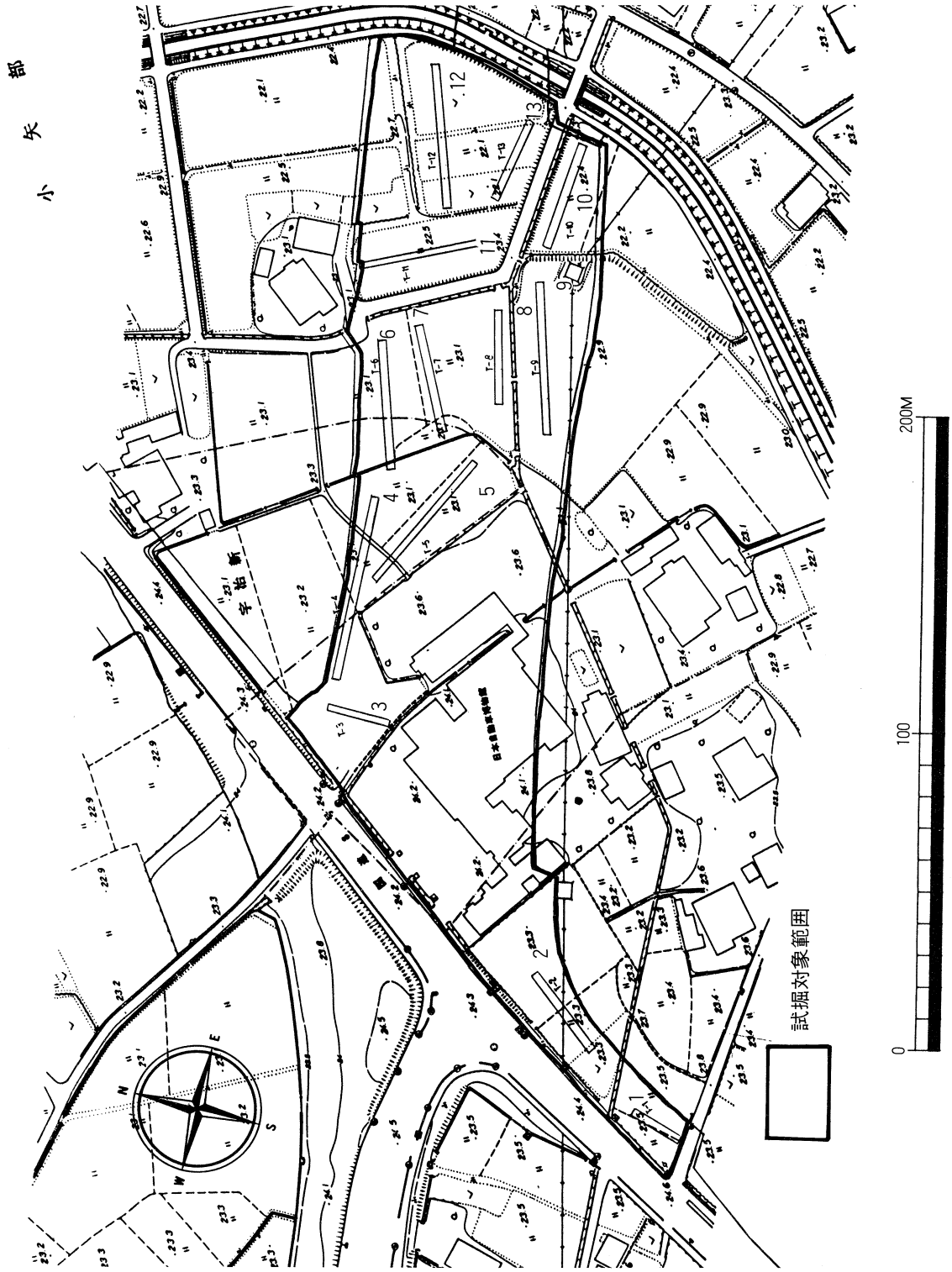
第8図　8トレンチ転ばし根太建物構造模式図

2. NEJ－A－04

(1) 概要（第９図、図版６）

対象地区は国道８号線に面しており、現況は水田であった。基本層序は耕作土(20cm)直下ですぐに黄褐色砂礫層が現れる。試掘トレンチは計13本である。いずれのトレンチも遺物包含層は全く見られず、遺物としては近世・近現代の陶磁器が耕作土中もしくは攪乱中から確認されている。遺跡を形成する遺構と思われるものはなく、３トレンチで土坑２基、４トレンチで現況畦畔痕跡、10トレンチで改修前の河川跡が見られたのみである。いずれも現代に帰属するものである。

以上のことから遺跡としては認定されなかった。　（河西）



第9図　NEJ-A-04試掘トレンチの位置　1:2,000

3. ＮＥＪ－０５（開酔大滝遺跡）

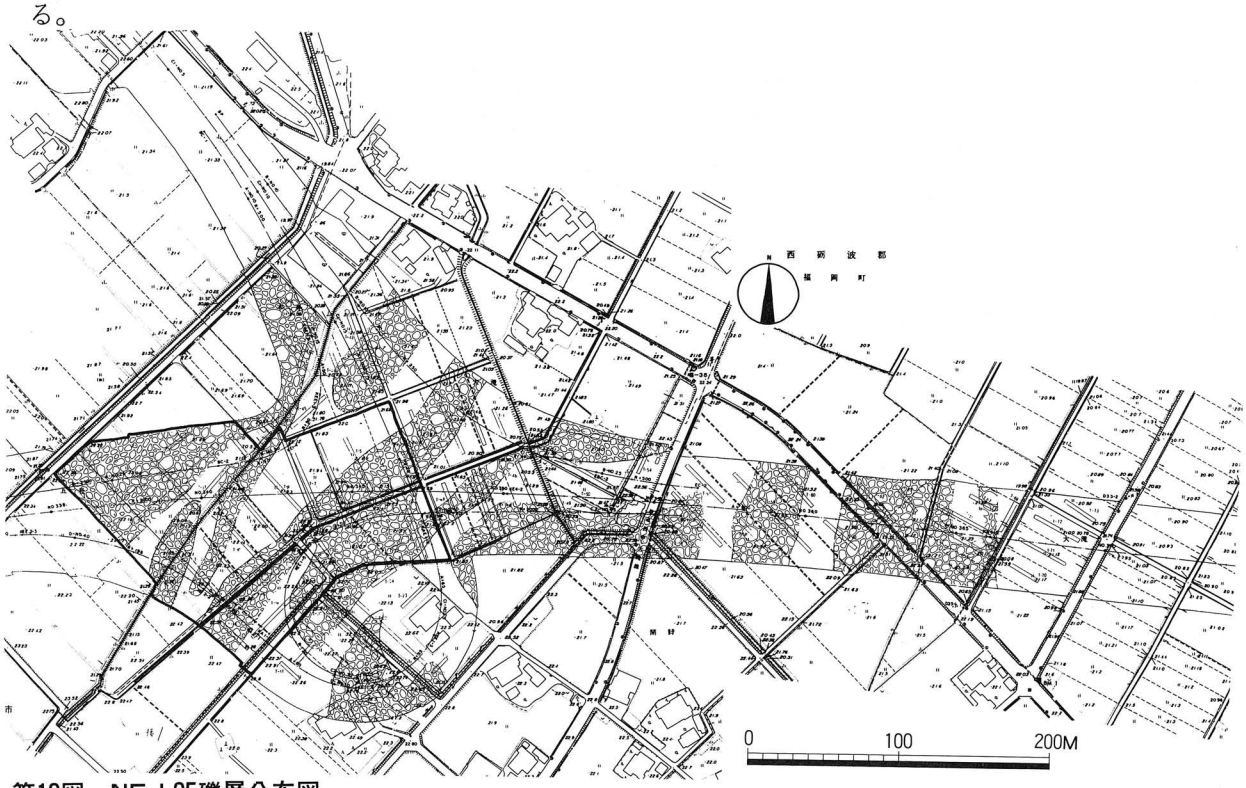
(1) 概要（第12図、図版７～11）

対象地区は現況が水田でかなり湧水点が高い場所である。地区のほぼ南北に礫層が隆起し、複雑な中洲状の地形である（第10図）。試掘トレンチは西側インターチェンジ（円形部分）を起点として周囲に広げ、東方向に延ばした。計73本のトレンチを調査したが、遺跡として認められたのは西端部の５～16トレンチと25～38トレンチである。

基本層序は複雑な地形のため単純化できないが、１層（耕作土）：暗褐色シルト（10～30cm）、2層（無遺物間層）：褐色シルト・黄褐色砂礫など多様（10～25cm）、３層（遺物包含層）：灰褐色粘土質シルト（0～20cm）、４層（無遺物層）：青灰色砂質シルト・黄褐色砂礫、となる。２層は氾濫による堆積層と思われ、シルト・砂礫など様々な土を含んでおり、まれに近世陶磁器が混じっていることから近世以降の所産であろう。３層は遺物包含層でかなり粘性が強く、炭化物を含んでいる部分がある。礫層の隆起している部分では極めて薄くなる。遺構が見られるのは炭化物の含まれる部分であり、５トレンチより南側である。また、遺構の多くは３層を取り去って確認でき、３層土を埋土とするものもある。以下、トレンチのまとまりごとに概観する。

インターチェンジ北部にあたる１から４トレンチ及び46から48トレンチは３層に炭化物が混じらず、４層面から激しい湧水がみられた。遺構、遺物はない。

インターチェンジ中央部の５から16及び25から28トレンチは３層に炭化物がみられ、４層上面において遺構が確認された。溝は５から８トレンチで確認され、幅約１ｍほどのものである。土坑は９トレンチから16トレンチ及び25トレンチで計40基ほど確認され、特に13・14・15トレンチに密集する。土坑には直径70cmほどの方形もしくは楕円形を呈する柱穴が含まれる。また、７トレンチには石組の井戸、10トレンチには曲げ物の入った井戸がある。８トレンチには炭の集中が２箇所みられた。噴砂は細いものが所々にみられる。遺物は９トレンチで３層中から中世土師器が一点みつかったのみである。



第10図　NEJ-05礫層分布図　　スクリーントーンは礫層隆起部

インターチェンジ南部の17から24トレンチは南側で炭化物を含む３層があるものの、遺構・遺物は確認されなかった。北側では氾濫した黄褐色の砂が厚く堆積している。

対象区の西南部にあたる29から38トレンチでは総じて礫層が隆起しており、３層がやや薄く５cm程度である。遺構はあまり多くなく29・30トレンチで土坑が４基と33トレンチで溝がみられる。包含層からの遺物出土はなく、２層面の暗渠から肥前陶磁器が出土したのみである。

西北部の39から45トレンチは礫層が隆起し、３層はほとんどない。遺構・遺物も認められない。

対象区東部に延びる49から73トレンチでは礫層と砂層が入り交じり、３層はほとんどなかった。遺構はなく、遺物も１層・２層中より中世土師器・珠洲・近世陶磁器が数点みられた以外なかった。なお、噴砂は所々にみられるが、幅20cmほどのものが66トレンチで確認された。（河西）

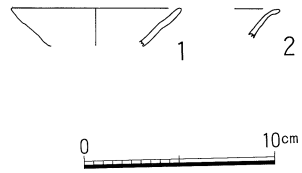
(2) 遺物（第11図）

出土遺物は極めて少なく、中世土師器・白磁椀１点、珠洲１点、肥前陶磁器（内野山窯製品）１点、伊万里１点を含む近世陶磁器数点である。１は中世土師皿で９トレンチ、２は白磁椀で15トレンチから出土した。（山本）

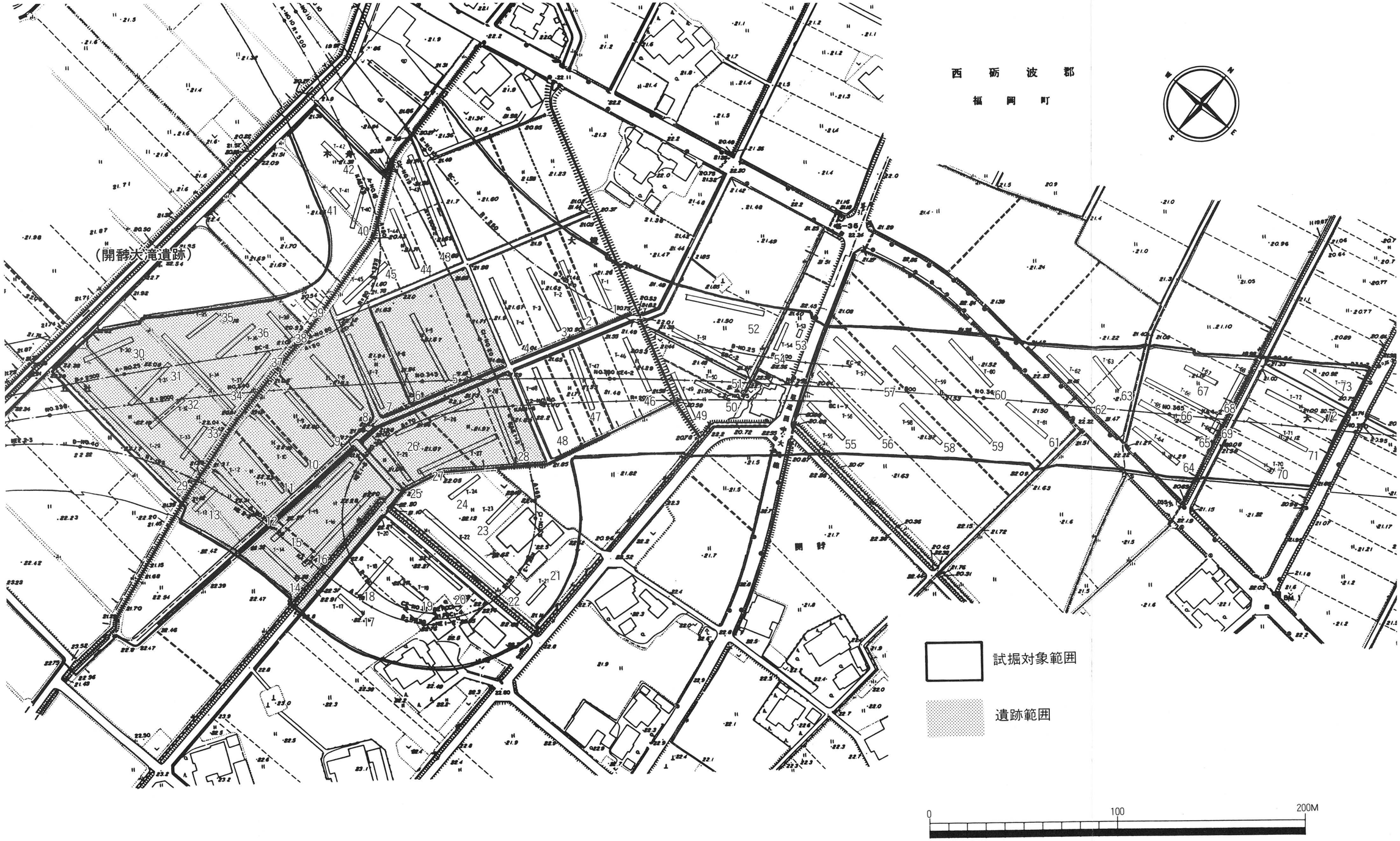
(3) 小括

遺構はインターチェンジ中央部に集中し、柱穴がみられることから集落跡と考えられるが、包含層出土の土器が一点のみであるためその帰属時期を決定するのは困難である。土器の観察からは15世紀から17世紀だろうと想像できる。遺構の面から考察すると、柱穴が直径70cm前後と中世前半のものとは異なることがわかる。中世末から近世にみられる大型化した柱穴と考えれば、福光町香城寺跡や婦中町新町IIのものと比較することができる。ただし、大型の柱穴でいえば古代の可能性もあり、即断できない。

また、氾濫堆積の点で興味深いことがある。当地区の西側にあたるＮＥＪ－Ａ－０３では中世末から近世の遺構面は表土直下もしくは２層にあり、氾濫堆積層はその上部にない。また、南約500ｍにある小矢部市五社遺跡（平成４年度調査）では２枚の氾濫堆積層が確認されているが、上層氾濫面は珠洲Ｉ期遺構面の下にあり、下層氾濫面は古代末遺構面の下・古代後半遺構面の上に存在する。となると当地区の氾濫堆積層（２層）は近世以降に属するものと思われることから、これらとはかなりのギャップをもつことになる。基盤となる礫層隆起の分布からみると、氾濫流路の水系が上記の２箇所とは一本東にずれ異なるようであるが、これほどに変わるものか氾濫堆積の複雑さを思い知らされる。この氾濫堆積は庄川水系の洪水によってもたらされたようで、富山県史（近世篇下）・砺波市史によれば近世以降でこの付近にまで被害が及んだものに1772年（明和９）、1877（明治10）、1895（明治28）がみられる。また、砺波市鷹栖口には取入堰がありその下流域に相当するため、これが流出した例を含めると更に多くなる。おそらく実際はかなりの頻度で出水があったと思われ、幾度となく繰り返す洪水に苛まれていた背景をみて取れる。（河西）



第11図　開蒔大滝遺跡出土遺物 1:4



第12図　NEJ-05試掘トレンチの位置　1:2,000

4. ＮＥＪ－０６－ａ（江尻遺跡）

(1) 概要（第14図、図版12～14）

ＮＥＪ－06－ａと後に記す同－ｂは試掘当初、１つの遺跡と推定されていた箇所である。そのため試掘トレンチは、対象地区の東側から１トレンチとし、西に向って進行させたが、遺構・遺物の広がりは大きくａ・ｂ地区に分かれた（第14図）。また、ａ地区は、さらに東に広がり対象区を拡張する事とした。トレンチ設定総数は計57本である。以下、調査の概要を個別に述べる。

ａ地区は、標高が西側水田部分で約19.4ｍ、中央宅地部分で約19.2ｍ、東側水田部分で約18.7ｍを測り、全体に北東方向に下りながら東端で約１ｍの落差で次の水田部分に続く。当地区では、計15本のトレンチを調査したが、遺跡として確認したのは１～４・47～53トレンチである。一帯の基本層序は、１層（耕作土）：暗褐色シルト（10～40cm）、２層（遺物包含層）：灰褐色土・同シルト・黄暗褐色シルト等（０～35cm）、３層（無遺物層）：黄暗褐色粘質土・同シルトとなり以下が砂礫層。２層は、トレンチによって多少異なり、１～４トレンチでは、所により上面に黄灰褐色シルトが約20cmの厚さで堆積する。３層は遺構確認層で、遺構の多くはその上面で確認したが、１～４トレンチの近世遺構には前記の層から切り込むものが多々観察できた。以下、トレンチのまとまりごとに概観する。

西側の１～４トレンチでは、４から１トレンチかけて幅10ｍ前後の谷部が認められ、その東に位置する２トレンチは３層までが浅く、東側に隆起する地形がよみとれる。遺構は、１～３トレンチで確認され、長楕円の柱穴11・土坑13・溝６がある。大半が１トレンチに集中し、柱穴には柱根を残すものが多い。また、各遺構は前記した谷部が埋まった後、構築されており下部の谷部内には遺物が認められない。遺物は、近世の陶磁器を主体に各トレンチから出土する。２・３トレンチでは弥生土器も見られたが、細片で氾濫もしくは後の耕地整理による混入と考えられる。

中央の47～50トレンチでは、47・48・50トレンチと谷部が続き、その東側に当たる47トレンチ東端部の高所で遺構が確認される。長楕円の柱穴１・土坑３・溝２で、同トレンチの２層から比較的まとまった弥生土器、さらに近世陶磁器の出土をみた事から周辺に可成の遺構の存在が推定できる。また48トレンチでは、谷部を切り込む水路跡が確認でき、近世陶磁器を伴った。

東側の51～53トレンチでは、中世～近世の陶磁器が出土する。一帯は広い谷部の一部と思われ、砂礫層まで１ｍを越える箇所がある。53トレンチで３層を掘り込む溝３が確認された。（神保）

(2) 遺物（第13図、図版14下）

弥生時代後期後半から終末期（１～８）と近世（９～16）に属するものがみられる。弥生土器には、主に甕、壺がみられる。１～４はすべて「く」の字状口縁をもつ甕である。１は端部をつまみ上げる。３・４は、口縁端部が角張るものである。５～７は壺である。５は幅広く外反する有段口縁をもち、口縁端部は角張っている。口唇部に赤彩痕跡がみられる。７は有段口縁に擬凹線を引くものである。８は上部に杯のようなものが付くと考えられる脚台部で、外面は赤彩を施し、凹線をめぐらす。東海地方のながれをくむものである。

近世陶磁器には肥前陶磁器（９・10）、伊万里（11）、越中瀬戸（12～15）がみられる。９～11は皿である。９はコンニャク印判がみられる。18世紀後半のものである。12・13は擂り鉢である。12は口縁端部を内側に、13は外側に広げたもので、それぞれ18世紀以降と17世紀代のものである。14・15は皿である。15は長楕円柱穴の上面から出土したものである。内外面に鉄釉を施し、底部に回転糸切り痕を残す。18世紀代のものである。

以下、各トレンチごとの遺物を示す。１トレンチ：９・15、47トレンチ：１～４・７・８・13・14・16、48トレンチ：５・10～12（佐賀）

(3) 小括

遺跡の時代は、大きく弥生時代と近世に分けられる。弥生時代は明確な遺構が確認されなかったが、2・47トレンチの状況及び出土遺物から弥生後期後半から終末期の集落跡の一部を形成すると考えられる。範囲は、中央宅地部分の南東側一帯で、当時期の遺跡本体はさらに路線外南に広がるものと思われる。また、近世は1トレンチ付近を中心に、掘立柱建物群の存在が推定される。地元の話では、かつて一帯には大西家門邸が存在し、御亭跡であったと言う。出土遺物も17～18世紀のものが主体を占めており、遺跡一帯には近世の豪農またはそれに類する人の屋敷跡と付属施設の存在が想定できる。

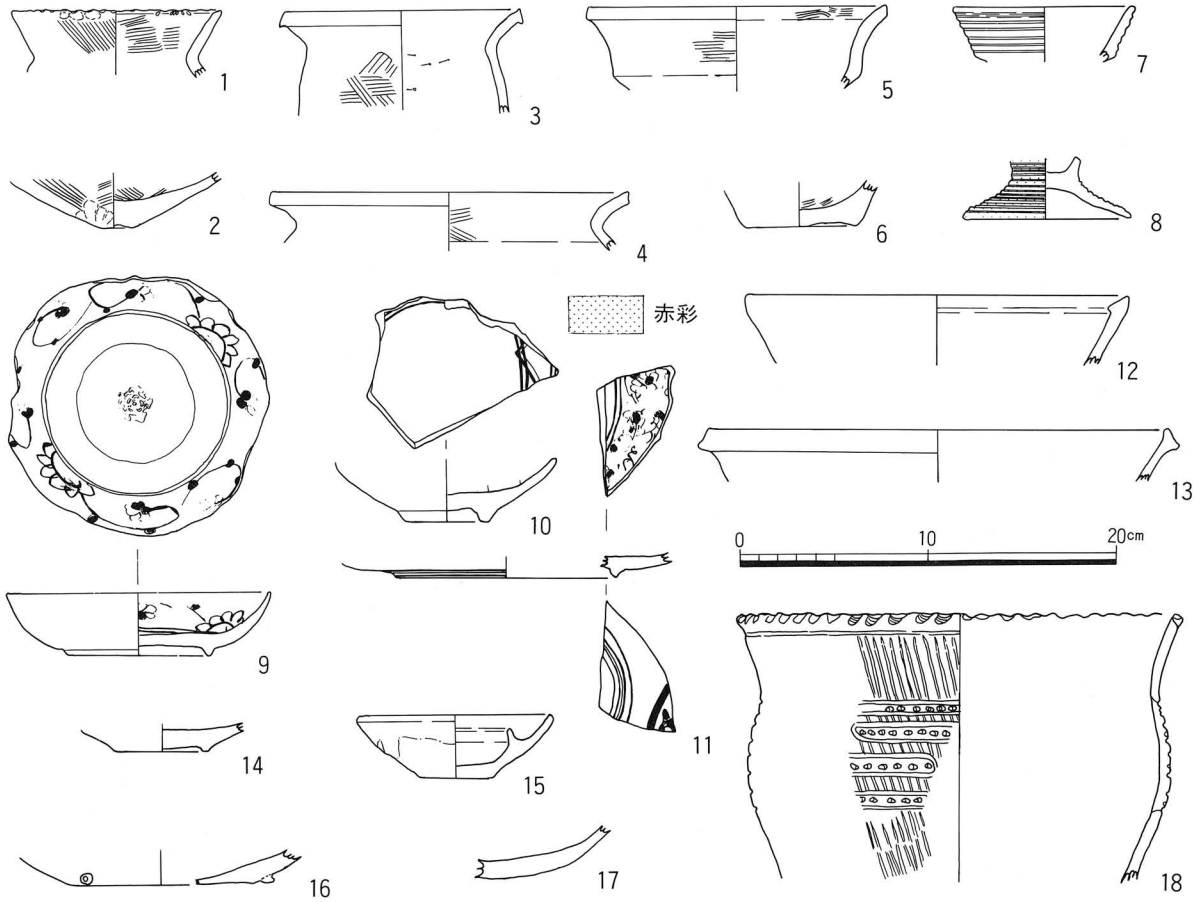
5. NEJ－06－b（蓑島遺跡）

(1) 概要（第13・14図、図版12～14）

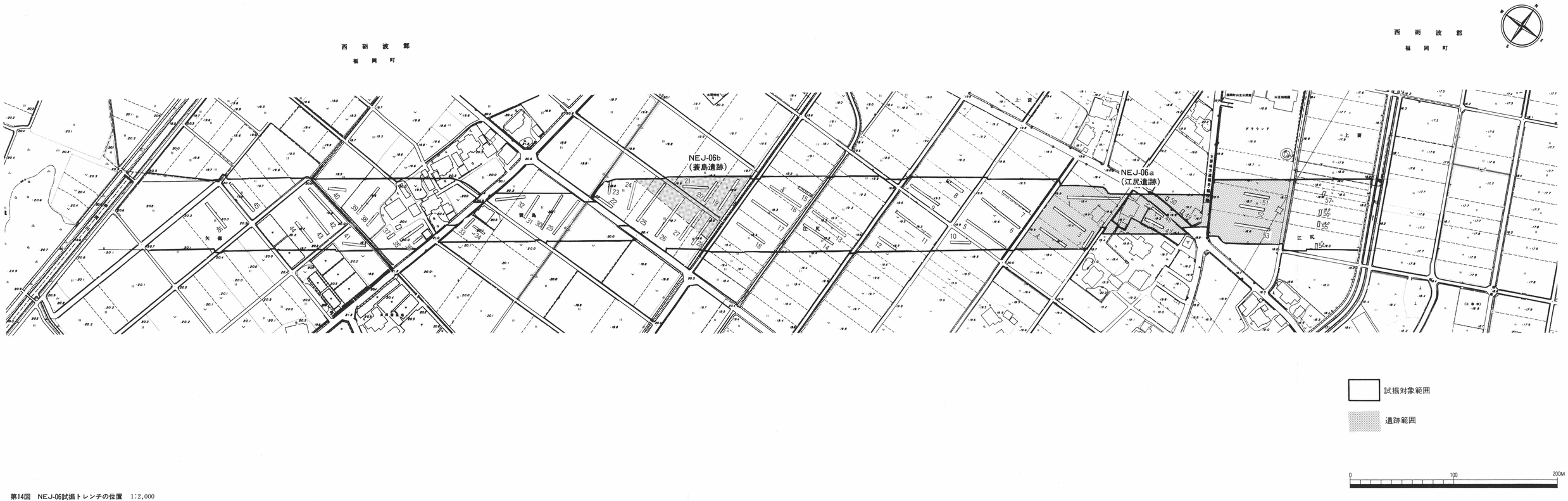
対象地区一帯は標高が約19.7mで、南が農道、東が用水で区切られた狭い範囲である。調査では、計10本のトレンチを設定したが、遺跡として確認したのはトレンチ19～21と同25～28北側である。

基本層序は、1層(耕作土)：暗褐色シルト（20～35cm）、2層（無遺物層）：黄褐色粘質土・灰褐色粘質土（10～45cm）、3層（遺物包含層）：黒褐色粘質土（10～20cm）となり、4層の地山層（黄褐色粘質土）に続く。一帯の土質は水分が多く、2層まで及ぶ噴砂痕跡が所々で見られた。

遺構・遺物は少ない。トレンチ26～28で2層上面から切り込む溝が各1、同20で4層を掘り込む土坑1が確認された。前者は、付近の耕作土中でまれに近世陶磁器が見られた事から近世以降の所産、後者は、覆土及び周囲の3層下部に縄文晩期の土器が混じる事から同時代の所産と考えられる。晩期の土器は、口唇部を指・クシ状工具で押圧した深鉢形土器（第13の18）で、器面に同工具による条線、棒状工具による沈線・列点文を施し晩期後半の下野式土器に比定される。その他、トレンチ27の攪乱土から瓦器と思われる内外面黒色の磨研土器（同17）の出土をみたが、帰属時期がはっきりしない。以上、当遺跡の性格としては縄文晩期後半の集落跡とみるが、本体はやや北に外れるようだ。(神保)



第13図　江尻・蓑島遺跡出土遺物　1:4(1～16．江尻遺跡出土，17・18．蓑島遺跡出土)



第14図　NEJ-06試掘トレンチの位置　1:2,000

6. ＮＥＪ－０７（下老子遺跡）

(1) 概要（第15・16図、図版15～17）

対象地区は現況が水田・宅地・畑地で、前者が大半を占めている。一帯の標高は、西側水田部分で17.3～17.5m、中央水田部分で18.3～18.9m、東側水田部分で17.8～18.8mを測る。全体としては、南から北に向って緩く傾斜し、東西にややきつい傾斜を見る。特に西側の宅地部分から水田部分は、落差約１mの崖状を呈している。地元の話では、元はさらに落差があったが、昭和38年頃、当時としては大規模な耕地整理を実施し、その一帯の土を東側水田部分の低所に客土したとの事である。お陰で、現況は水田地帯として平坦な地形が続くが、試掘調査をしてみると所々で谷部が埋まり込んだり（第15図）湧水したり、沼状の箇所があったりで、幾度となく氾濫が繰り返された事が窺えた。

当地区の試掘トレンチは、ほぼ中央部を南北に横切る町道の北東際から１トレンチとして周囲にひろげ、さらに町道の西側へと設定していった。トレンチ設定総数は計74本で、遺跡として確認したのは１～67トレンチまでの範囲である（第16図）。以下、その箇所を中心にトレンチのまとまりごとに概観していく。

東側水田部分のトレンチ１～43では、弥生時代後期の遺構・遺物が多くまとまった。基本層序は、１層（耕作土）：暗褐色シルト（10～40cm）、２層：灰黄褐色粘質土・同シルト・灰黄白粘質土・青灰白粘質土等（０～65cm）、３層：黒茶褐色粘質土・同シルト（０～35cm）、４層：灰茶褐色粘質土（０～25cm）となり、５層の青灰色もしくは黄褐色の粘質土やシルト層を経て以下の砂礫層に至る。２層は、先の客土または氾濫堆積土に由来する土層と思われ、トレンチにより厚みが変化し、トレンチ１・20・36では古代の須恵器や中世の珠洲焼が混じった。３層・４層は弥生の遺物包含層で、４層が５層地山層にいたる漸移層である。いずれも水分を多く含み、いわゆるヨシ・アシなどの植物遺体が多量に入る。厚さも所により変え、遺構が集中する箇所では４層下部に炭粒の混入が多々確認された。５層までの深さは総じて深いが、トレンチ42・43では耕地整理の影響で、２層直下がすぐに５層面に達する。また、トレンチ37・38の東側部分では、５層まで客土が充満する箇所や砂礫が不自然に隆起した箇所も見られ、前者に中世以降の漆器片が含まれた。

遺構の多くは、５層上面で確認される。その覆土は５層と色別が困難なものが多く、炭粒の混じりを手がかりとして、トレンチ１～４・９・19～26・28～35で竪穴住居跡（？）の柱穴30以上、土坑20以上、溝27が確認された。大半が地区の東側トレンチ24～35に集中し、竪穴住居跡と思われる同26・29・31・33・35検出の柱穴では、柱根を残すものが見られる。その他、地区の西側・中央・東側のトレンチ一帯で幅10～20mの谷部２と幅２～４mの川跡が認められた。谷部は、東側のものが幅広で最深部が２mを越す。覆土中に大きな流木も混じったが、いずれも遺物の出土は見られない。また、川跡は３層から５層にかけてと浅い。トレンチ23の部分では、覆土上部に弥生土器の流れ込みが見られ、肩部には自然木の木根痕跡が残り、往時の川跡として確認された。

遺物は、弥生時代後期前半から後半にかけての土器や碧玉の剝片・炭化材が見られる。トレンチ１～23・43等では散発的な出土であるが、遺構集中区では濃密に出土する傾向がある。遺物の多くは、それら遺構内に廃棄されたものと見られる。

中央水田部分のトレンチ44～56では、弥生時代後期後半から終末期の遺構・遺物が確認された。基本層序は東側水田部分一帯と同一で、１層（10～50cm）、２層（10～40cm）、３層（０～30cm）、４層（０～10cm）と続き以下５層を経て砂礫層に至る。ただ、３層の上部に遺物が集中し、４層下部での炭粒の混入は認められない。また、トレンチ44～46では、覆土に付近一帯の１層中でしばしば見ら

れる近世の陶磁器を含む溝が２層面から切り込んで見られた。

遺構は、トレンチ48～55で黒茶褐色粘質土を覆土とした竪穴住居跡・同柱穴・土坑・溝約20が点在した。トレンチ52で確認した２棟の竪穴住居跡は、いずれも直径約５ｍの円形プランで覆土上部に多量の遺物を含む。また、トレンチ55の溝には脚部を欠く高杯、石鏃が伴った。これら遺構から出土する遺物は終末期のものがめだつ。なお、トレンチ56の西端で谷部を確認したが、遺物は無いようだ。

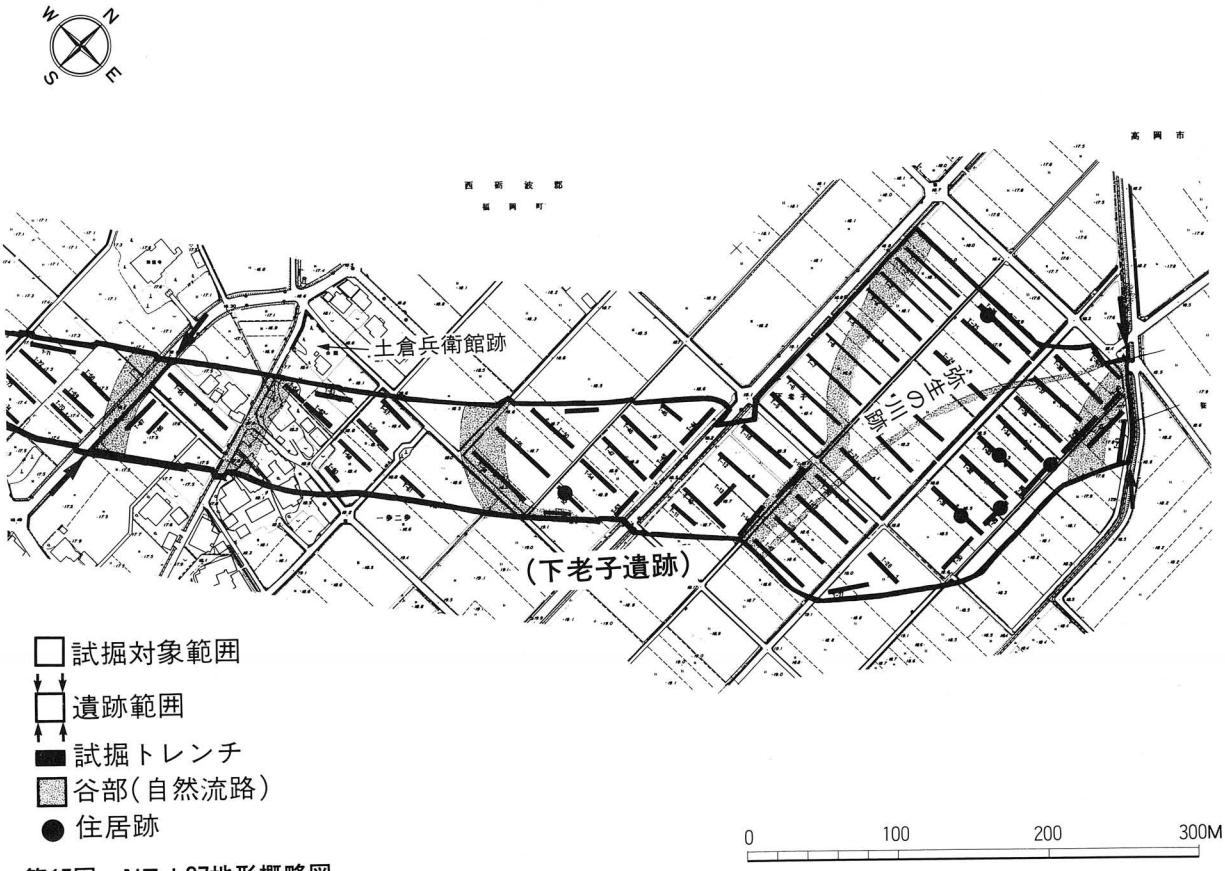
中央水田部分のトレンチ57～64は、先でふれた通り耕地整理時に削土された一帯にあたる。このため、１層（10～45cm）、２層（15～85cm）の下がすぐに５層を経て砂礫層に至る。５層の厚さもそれまでとは薄く、トレンチ61付近では砂礫が主体となる。また、トレンチ64の西端では、客土された深さ２ｍ以上と思われる谷の肩部が確認された。

遺構・遺物は、極めて少ない。トレンチ61で黒茶褐色粘質土に小砂利を含む覆土をもつ土坑２、同60・62で茶褐色粘質土を覆土とした土坑７を確認したにすぎない。また、遺物も同62の土坑と61の１層中で近世の陶磁器をみるに留まった。

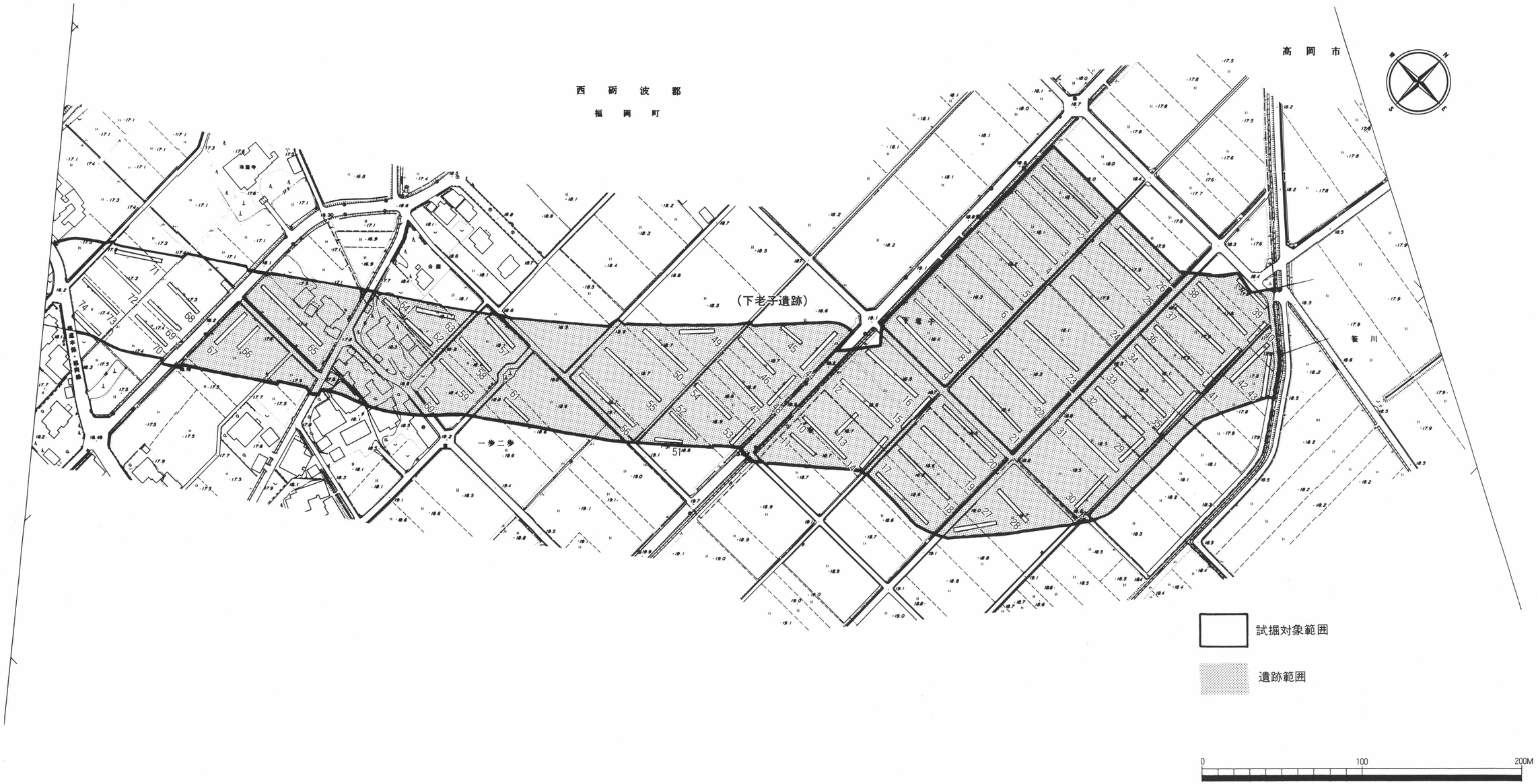
西側水田部分のトレンチ65～67では、近世を主に遺構・遺物が認められた。基本層序は、これまでとは様相を異にし、１層（耕作土）：暗褐色シルト（20～30cm）、２層：灰黒色粘質土・灰黄色シルト（０～18cm）、３層：黄褐色シルト層を経て以下の砂礫層に至る。総じて、３層地山面まで浅く、２層を欠く部分が多々見られる。

遺構は２層下部に切り込み面をもち、灰黒色粘質土を覆土とする。トレンチ65・67から掘立柱建物の柱穴・土坑・井戸（？）・溝を約12確認した。特にトレンチ67では、南端を横切る谷部沿いに遺構が密集し、覆土中に近世陶磁器や下駄など遺物が含まれたが、谷部及びその西側一帯のトレンチでは遺跡として認められるものはなかった。

（神保）



第15図　NEJ-07地形概略図

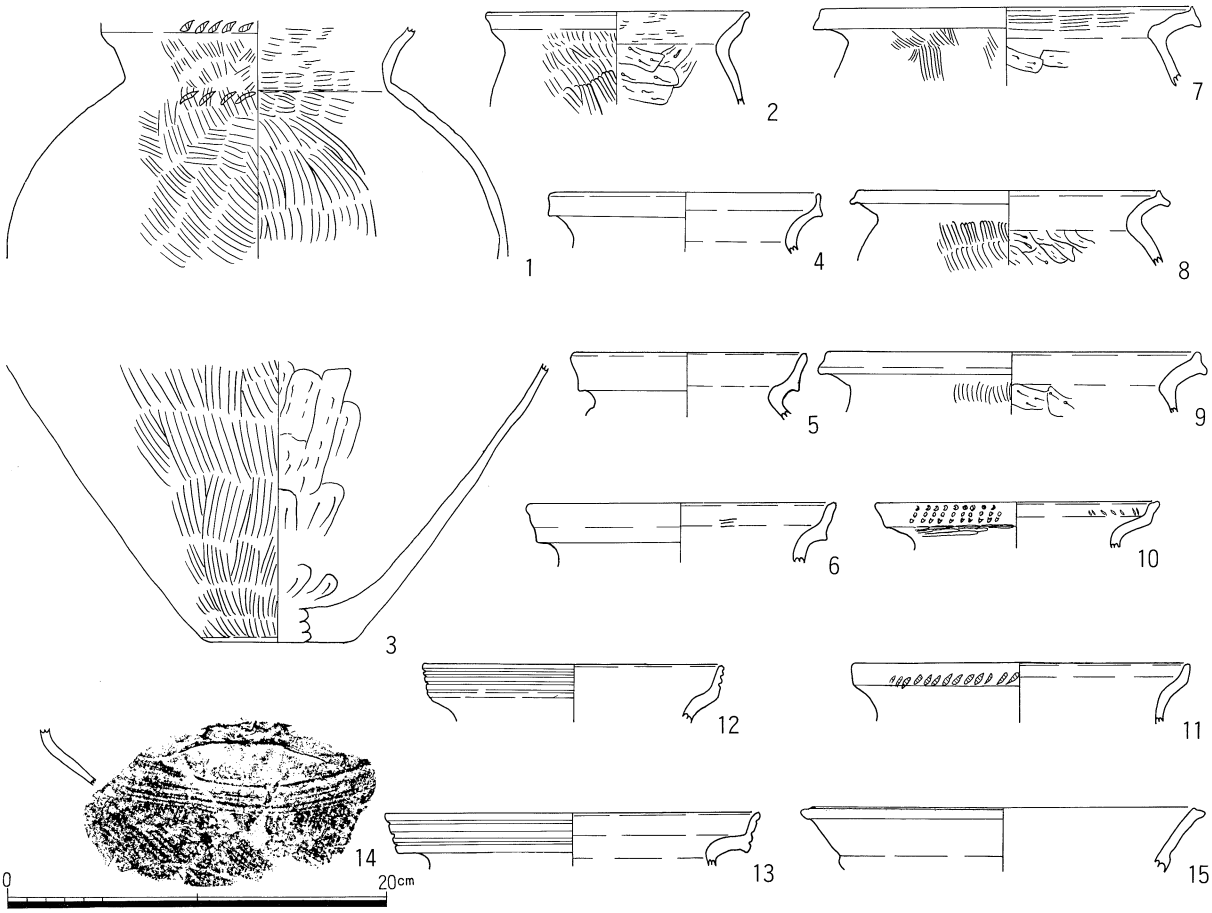


第16図　NEJ-07試掘トレンチの位置　1:2,000

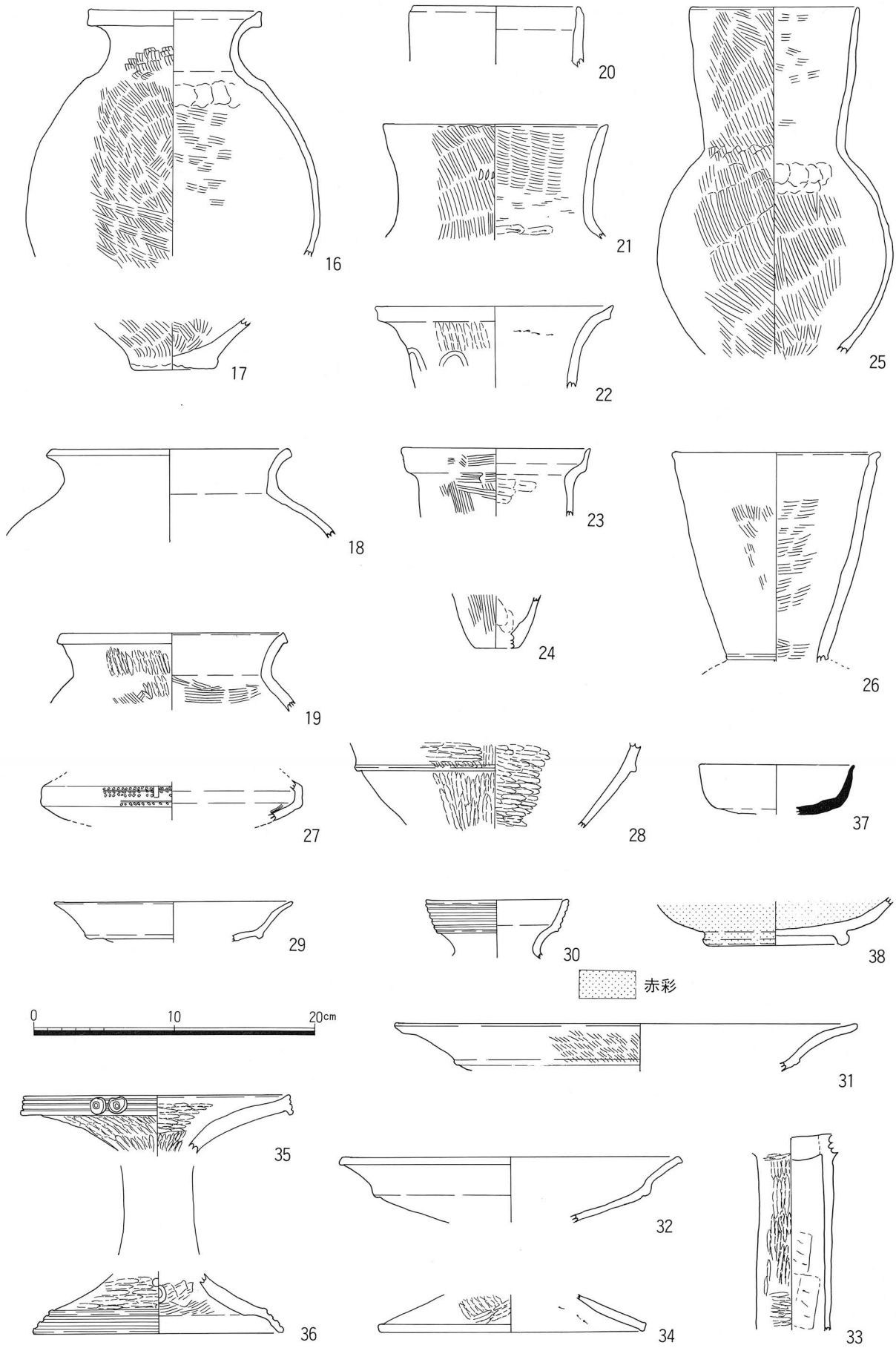
(2) 遺物（第17～20図、図版18～20）

弥生時代後期に属するものは弥生土器（１～36・39～61）、石鏃（62）がみられる。また奈良時代、近世に属するものは須恵器（37）、陶磁器・木製品（38・63～65）がみられる。１～48は町道から東のトレンチ、49～65は西のトレンチから出土したものである。

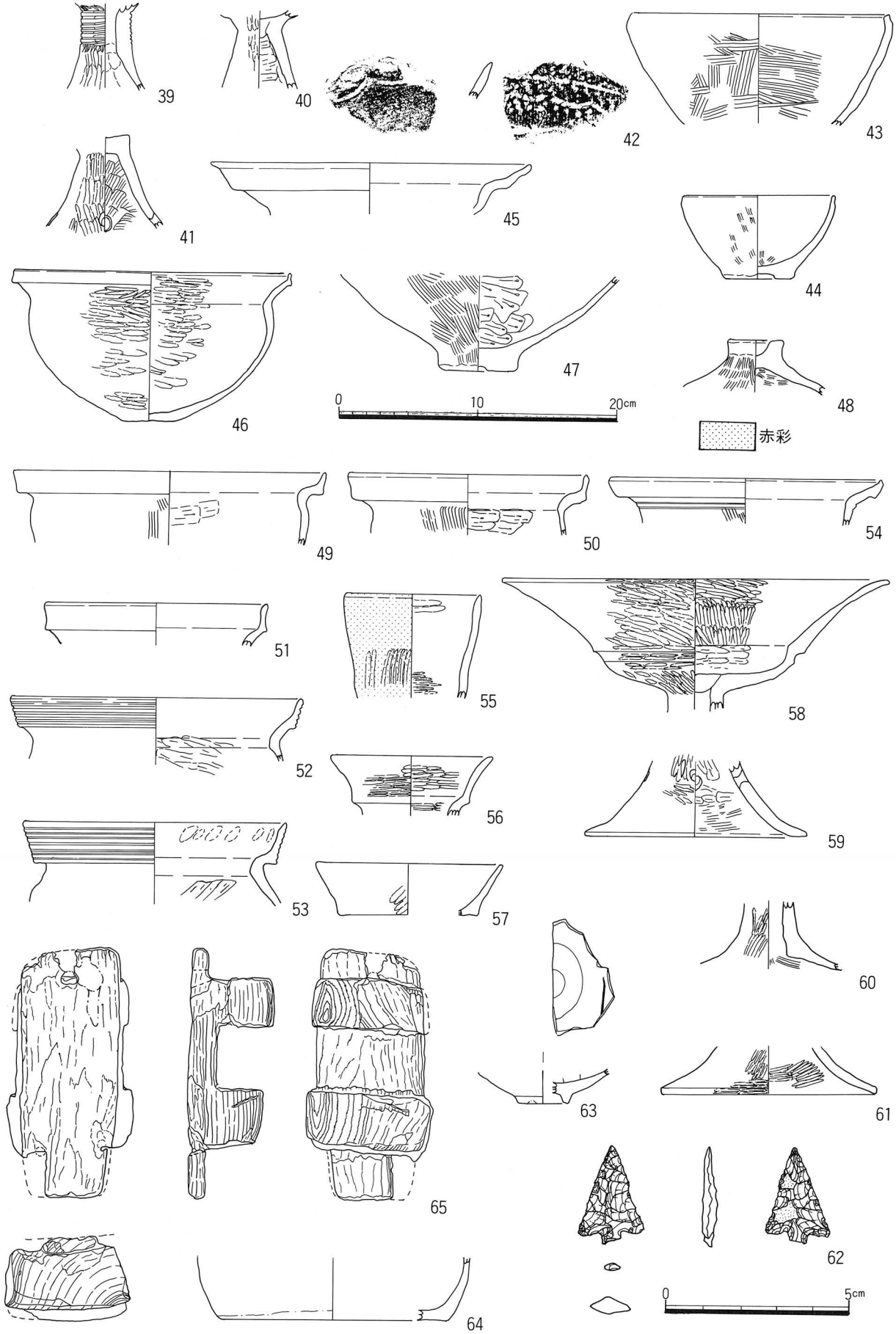
１～15は甕である。１は内外面ともハケ目調整を施し、口縁端部および肩部にハケ原体による刺突が入る。２は「く」の字状口縁をもち、端部をつまみ上げている。３は底部で、外面と底面をハケ目調整し、内面はヘラケズリを施す。４は有段口縁の幅が狭いもの、５・６は有段口縁の幅が広く、緩やかに外反するものである。７～９は口縁端部をつまみ上げ端部を広げた、いわゆる「能登型甕」といわれるものである。10・11・14は近江・東海地方の影響を受けたもので、口縁部や肩部に櫛状具による刺突文、平行線文を施す。10・11は受け口状の口縁部をもつ。12・13・15は有段口縁をもつものである。12は凹線を引くもので、口縁部は直立し端部を丸くおさめる。13は擬凹線を引くものである。16～19は口縁部が外傾する壺である。16は口縁部が内側に段をなし、短く立ち上がる複合口縁をもつ。17は16と同一個体の可能性がある底部で、内面に煤が付着する。18は口縁端部が角張るものである。19は口唇部に赤彩痕跡が残る。20～26は長頸壺である。21は口縁部が短く外傾する。外面には櫛状具による刺突が入る。22は口縁部が大きく外反し、端面を面取りする。外面は煤が付着しているが、ヘラミガキを施した後、ヘラで弧を描いている。23は有段口縁をもち、口縁部は直立する。24は23の底部の可能性があり、内面には指頭圧痕がみられる。25は頸部が体部より短く、体部は球形をなす。26はラッパ状に広がる頸部である。口縁端部は外側につまみあげており、口唇部に赤彩痕跡がみられる。27・28は台付壺の体部である。27は沈線を２条めぐらし、その上下に刺突文が入る。29・30は有



第17図　下老子遺跡出土遺物　1:4



第18図　下老子遺跡出土遺物　1:4



第19図　下老子遺跡出土遺物　62は1:1.5，他は1:4

段口縁をもつ壺である。29は口縁部が大きく外反する。30は擬凹線を引くもので、口縁端部は丸くおさめる。

31・32は高杯の杯部である。口縁部は大きく外反し、その長さは杯底部のそれに比べて短い。33は高杯の脚部で、棒状を呈する。35・36は器台で、同一個体の可能性がある。江上後期Ⅰ〔久々　1984〕にあたる。35は受部で、口縁端部を肥厚させて口縁帯をつくり、平行沈線を3条めぐらす。円形竹管浮文を貼り付けている。36は有段の裾部である。

37は須恵器の杯で、底面にはヘラ切り痕がみられる。8世紀のものである。38は漆器椀で、内外面とも朱漆塗りである。

39は脚部に凹線を引く器台である。40・41は短小化した高杯の脚部である。

42～47は鉢である。42は天王山系である。43・44は口縁端部が内傾するものである。45・46は有段口縁をもつもので、46の体部は、はりだす。47は凹底をもつ。

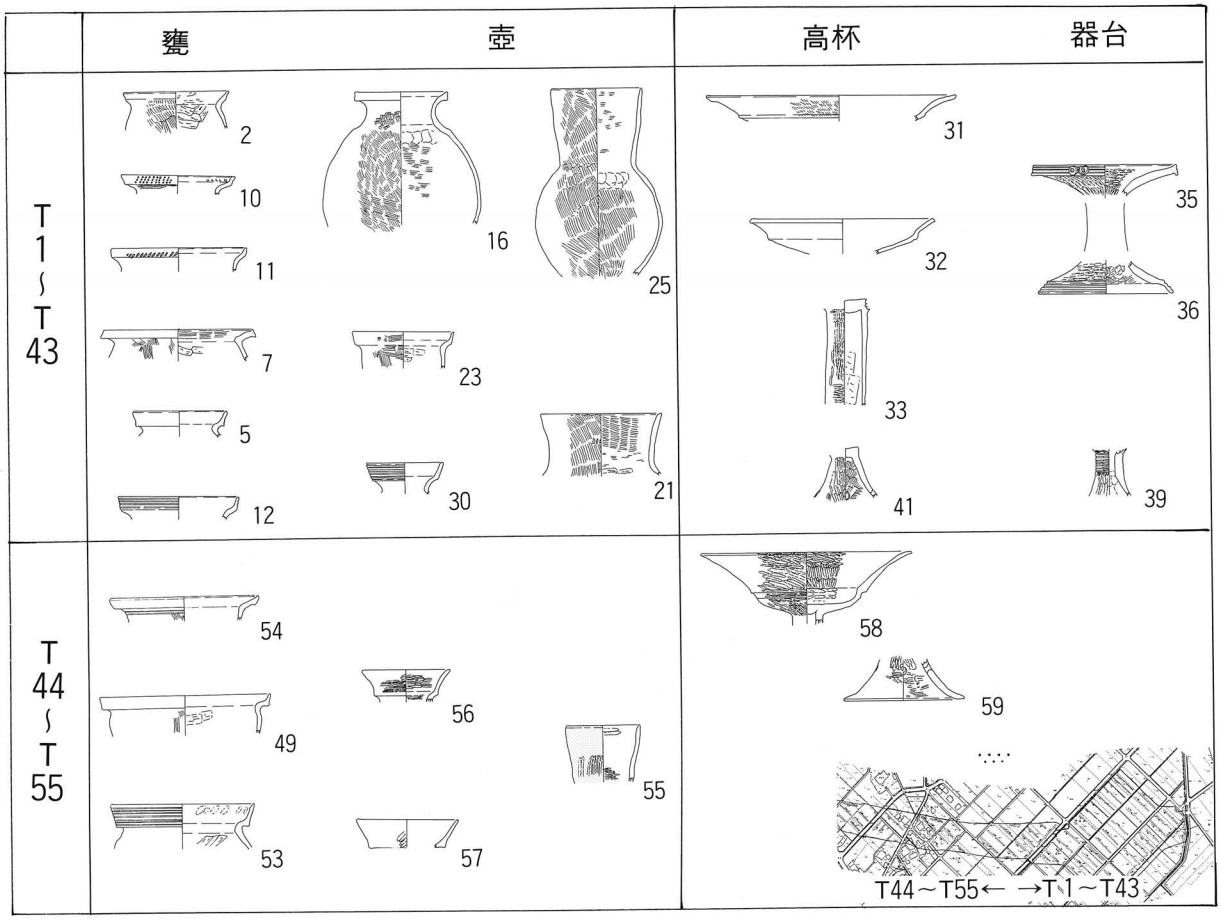
48は笠型をした蓋である。

49～54は甕である。49～53は有段口縁をもつもので、52・53は擬凹線を引く。53は内面に指頭圧痕を残し、月影式にあたる。54は口縁部が外反し、端部を広げてつまみ上げる。江上後期Ⅲにあたる。

55～57は壺である。55は口縁部が外傾する台付壺の頸部で、外面に赤彩が認められる。56・57は有段口縁をもつもので、57は赤彩痕跡がみられる。

58～60は高杯、61は器台である。58は溝の上面から出土したものである。口縁部が長く外反し、月影式にあたる。

62は鉄石英の石鏃で、溝の上面から出土した。また図には示さなかったが、碧玉の剝片が遺構上面



第20図　トレンチ別弥生土器の器種　1:10

などから出土している。

63・64は近世陶磁器である。63は肥前陶磁器の皿で、蛇の目釉剝ぎの後、色絵を施す。

65は連歯下駄で、台表先端部に指圧痕が残る。

町道東トレンチ出土の弥生土器は、甕や鉢において櫛状具による施文や天王山系といった中期の様相を残すものから、能登型甕などにみられる後期後半の様相が混在する。壺においては、有段口縁をもつもの、擬凹線を引くもの、頸部が体部より短く球形をなすものがある。高杯においては、口縁部が杯底部より短く、脚柱部が棒状を呈するもの、器台においては円形竹管浮文を貼り付けたものから脚部が短小化するものがある。このように古い要素と新しい要素が混在する。町道西トレンチ出土のものは、甕においては口縁部が短く外反し、端部をつまみ上げるものや擬凹線を引き内面に指圧痕を残すものがある。壺においては、口縁部が外反し、有段口縁をもつものがある。高杯においては、口縁部が外反し、杯底部より長いという後期後半から終末期の特徴がみられる。　以下、各トレンチの出土遺物を示す。

1トレンチ：37，5トレンチ：14，6トレンチ：30・42，11トレンチ：43，13トレンチ：33，19トレンチ：7，23トレンチ：10・13・16・17・25，24トレンチ：19，25トレンチ：6・15・23・24，26トレンチ：9・20・21・26・39・44・46・48，27トレンチ：1～3・5・8・11・12・27～29・31・34・41・47，29トレンチ：22，30トレンチ：4・35・36・45，38トレンチ：32・38，43トレンチ：18，47トレンチ：57，49トレンチ：49，50トレンチ：51・56，52トレンチ：53，54トレンチ：54・55・60・61，55トレンチ：50・52・58・59・62，62トレンチ：64，66トレンチ：63・65　（佐賀）

(3)　小括

今回、確認された下老子遺跡は延長約 600mに及び、さらに北側の試掘対象地区外へ延びるかと思われる大規模な遺跡である。遺跡は、時代により大きく弥生時代と近世に分けられる。

弥生時代は、対象地区の中央から東側をその範囲とし、後期前半～終末期にいたる大集落を形成する可能性が強い。さらに、その中を出土遺物から細見すれば、南北にはしる町道を境に東は後期前半の江上Ⅰ期〔久々　1984〕から後期後半の同Ⅲ期の遺物を伴う遺構群が、西は後期後半の江上Ⅲ期から終末期の同Ⅴ期（月影期）の遺物を伴う遺構群がまとまり（第20図）、東から西へといった集落の移り変りが読み取れる。

また、それら遺構群の立地を見ると、谷と谷に挟まれた微高地上に位置しており（第15図）、高所に集落をかまえ低所で稲作を行なう往時の姿が窺える。当遺跡が属す庄川扇状地の扇端部一帯は、高岡市石塚遺跡〔上野　1972〕を筆頭に稲作農耕を基盤とする弥生時代の集落が、県下で最初に定着した箇所の一つと見られており、扇端部周辺には縄文時代晩期や弥生時代中期から古墳時代初期にかけての遺跡が点在する。当、下老子遺跡もそうした動向にそって形成された遺跡の一つと思われる。

一方、近世は対象地区の中央から西、67トレンチ周辺を中心として掘立柱建物群が想定でき、南側対象地区外に延びる17世紀以降の集落遺跡の一角をなすと考えられる。また、その東にあたる57～64トレンチ一帯は、北に土倉兵衛館跡とされる高台が接しており、今回の調査では明確な遺構・遺物こそ確認されなかったものの、中世館関連の遺構が遺存する可能性がある。事実、地元の話ではかつてその高台は、当地に及び61トレンチ辺りまで続いたという。或いは、61・62トレンチで確認された土坑群がそれに当たるのかもしれない。周辺には、室町時代の由緒を伝える浜木三郎左衛門の塚や同氏が寺侍としてつとめた法筵寺が今も残り、一帯への中世遺跡の立地を窺わせる。先に記した近世集落跡もこれらを背景とし、その延長線上にある遺跡ともみられる。　（神保）

参 考 文 献

ウ　上野　章　1972　「概説　六、弥生時代」　『富山県史　考古編』　富山県

オ　小幡信夫　1969　「郷土を生み育てた自然」　『福岡町史』　福岡町

小矢部市教育委員会　1991　『小矢部市埋蔵文化財調査報告書第33冊　富山県小矢部市能越自動車道関係遺跡群試掘調査報告』

カ　河西健二　1992　『埋蔵文化財年報（３）　平成３年度』　財団法人富山県文化振興財団

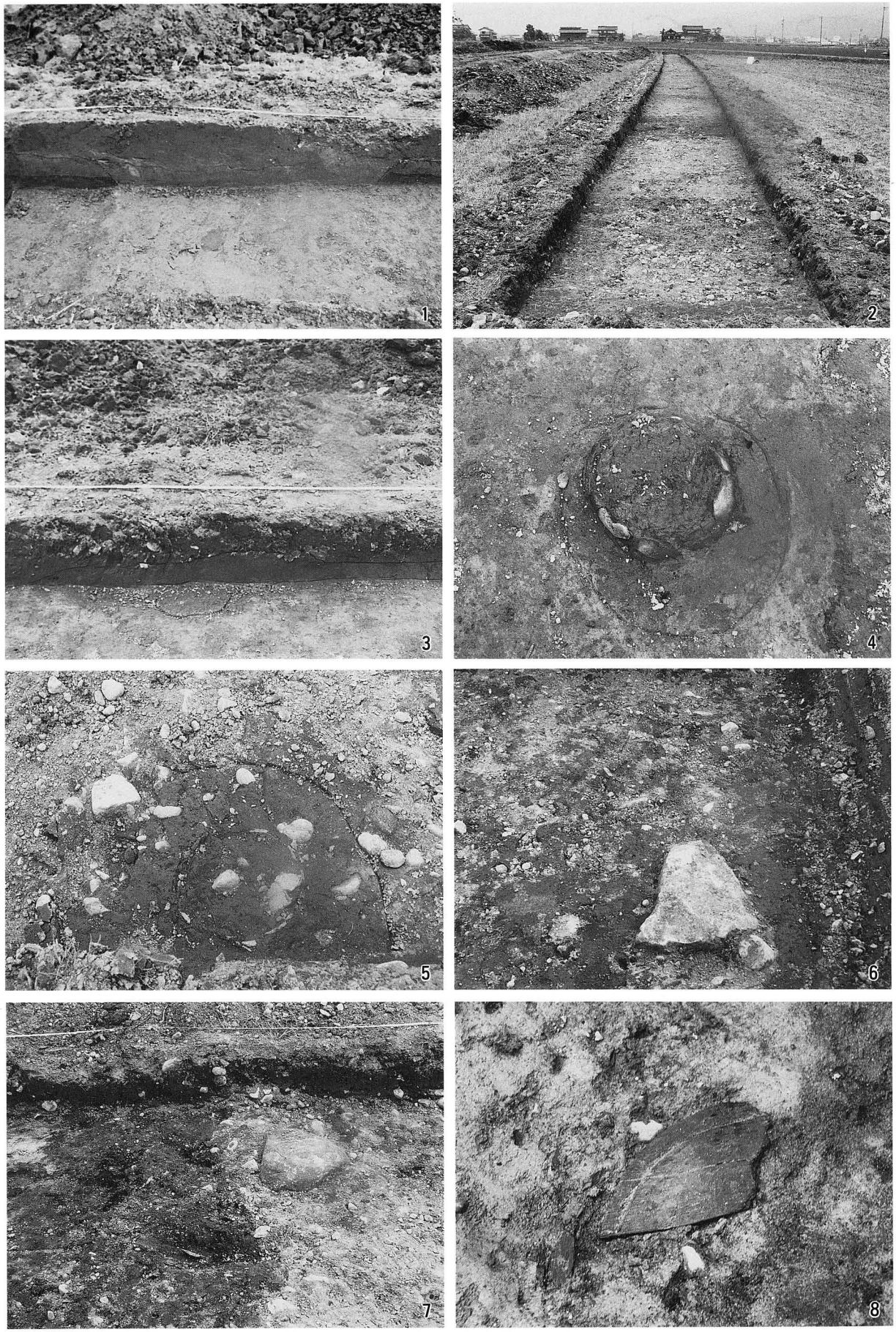
キ　木舟城保存会　1992　『貴船城今誌』

ク　久々忠義　1984　「II　総括　B　弥生時代の時期区分」　『北陸自動車道遺跡調査報告 —— 上市町木製品・総括編 ——』　上市町教育委員会

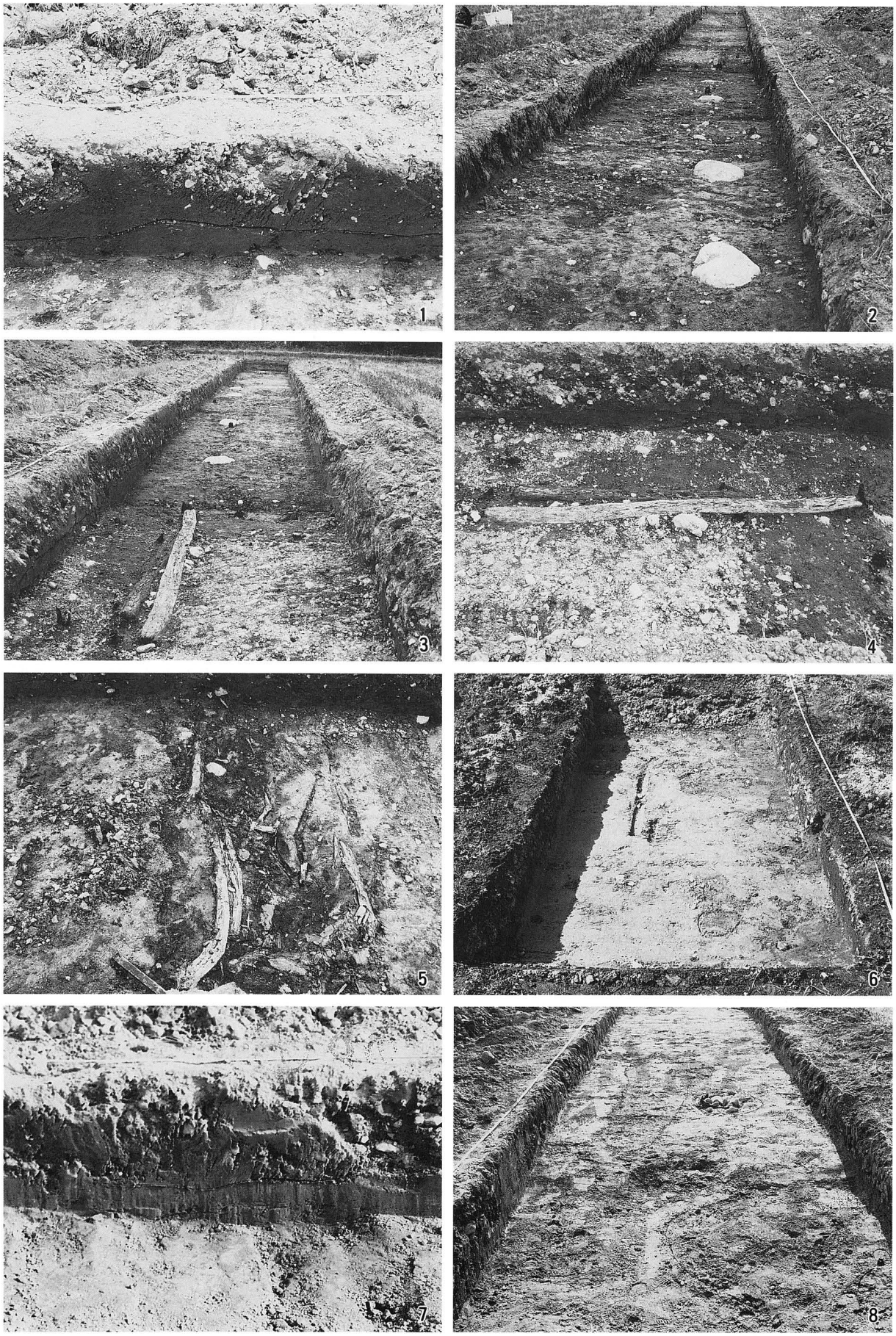
ト　富山県　1983　『富山県史　通史編Ⅳ　近世下』

砺波市史編算委員会　1984　『砺波市史』

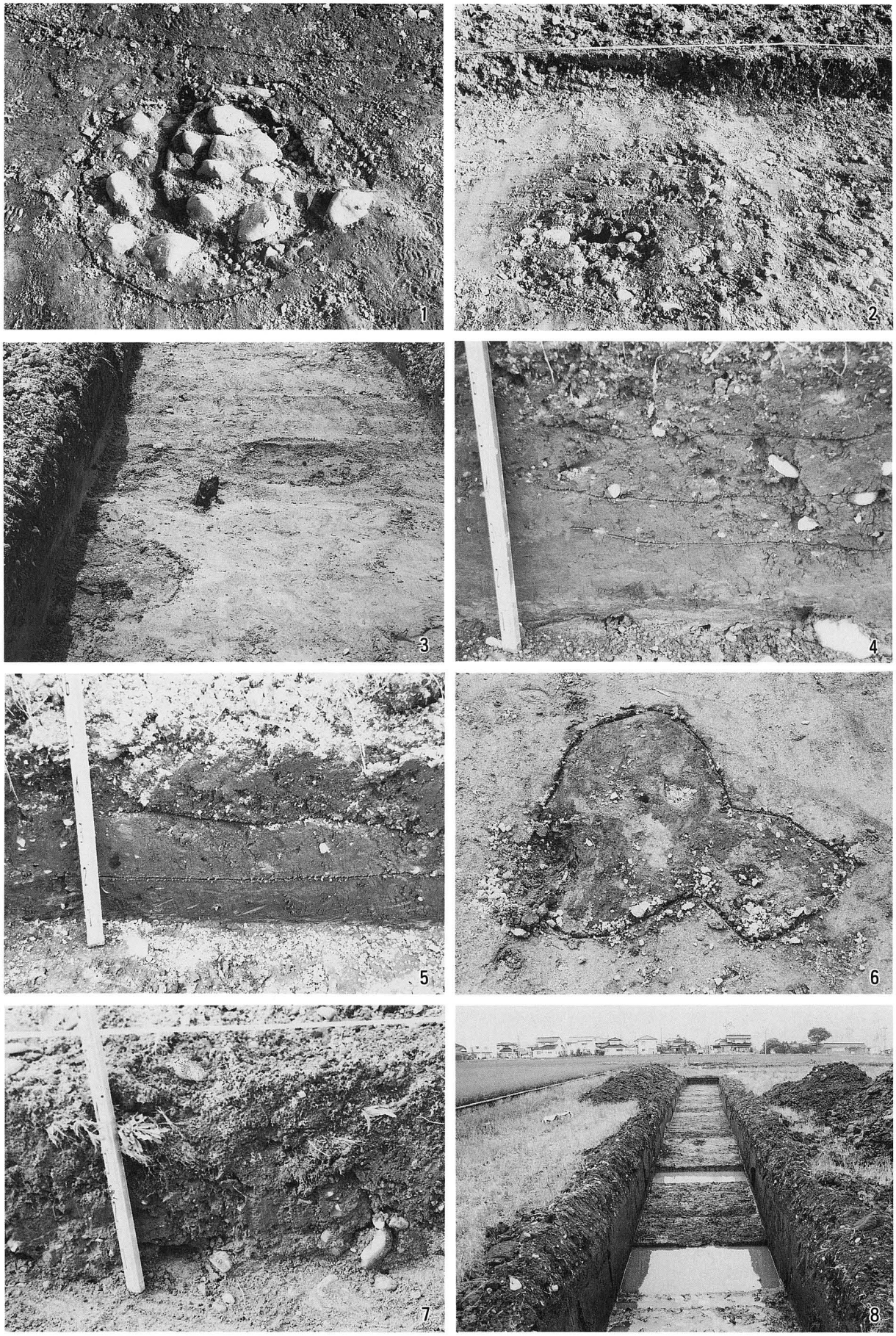
図版 1　NEJ-A-03　1．全景(東から)　2．1トレンチ　3．2トレンチ　4．2トレンチ溝　5．4トレンチ土層



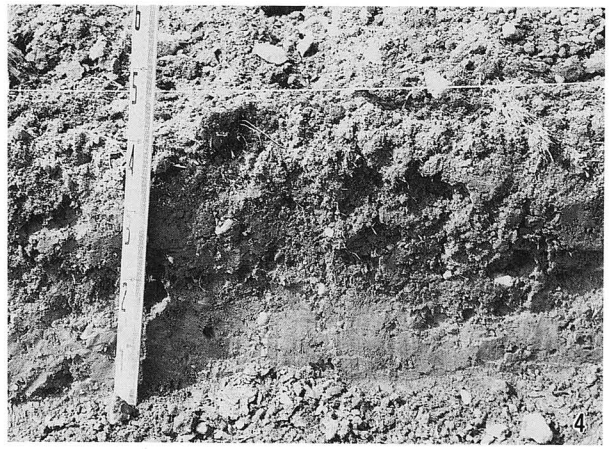
図版２　NEJ-A-03　１．４トレンチ土層と溝　２．５トレンチ　３．５トレンチ土層と穴　4･5．5トレンチ埋甕　６．7トレンチ礎石　７．７トレンチ礎石と溝　８．７トレンチ曲物出土状況

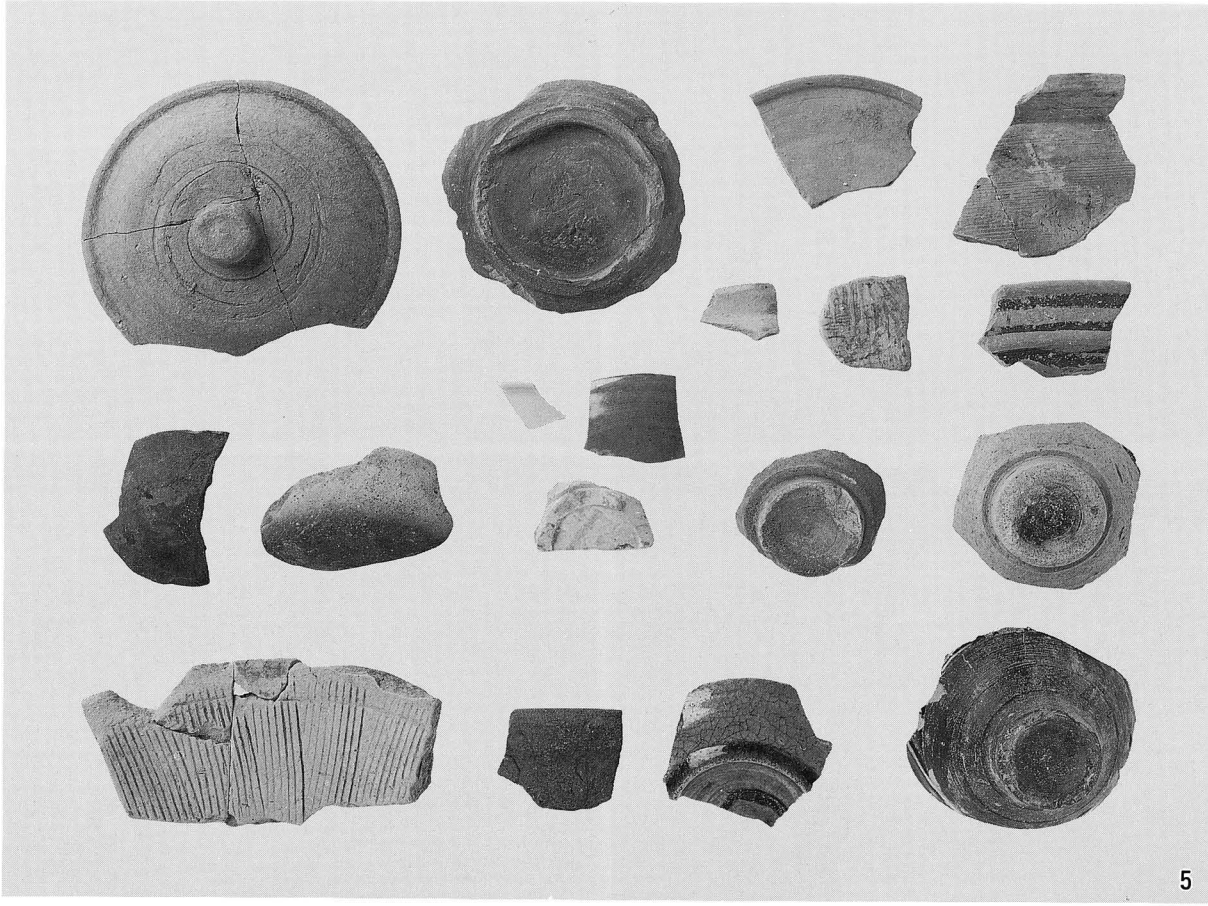


図版３　NEJ-A-03　１．８トレンチ土層　２．８トレンチ礎石立建物　３．８トレンチ転ばし根太をもつ建物と礎石立建物　４．８トレンチ転ばし根太　５．８トレンチ炭化面　６．９トレンチ穴　７．11トレンチ土層　８．11トレンチ土坑と井戸



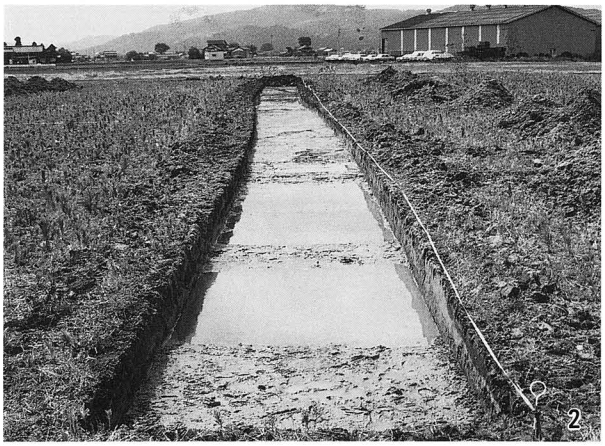
図版４　NEJ-A-03　１．11トレンチ井戸　２．12トレンチ井戸　３．15トレンチ穴　４．16トレンチ土層　５．16トレンチ土層　６．16トレンチ穴　７．18トレンチ土層　８．20トレンチ



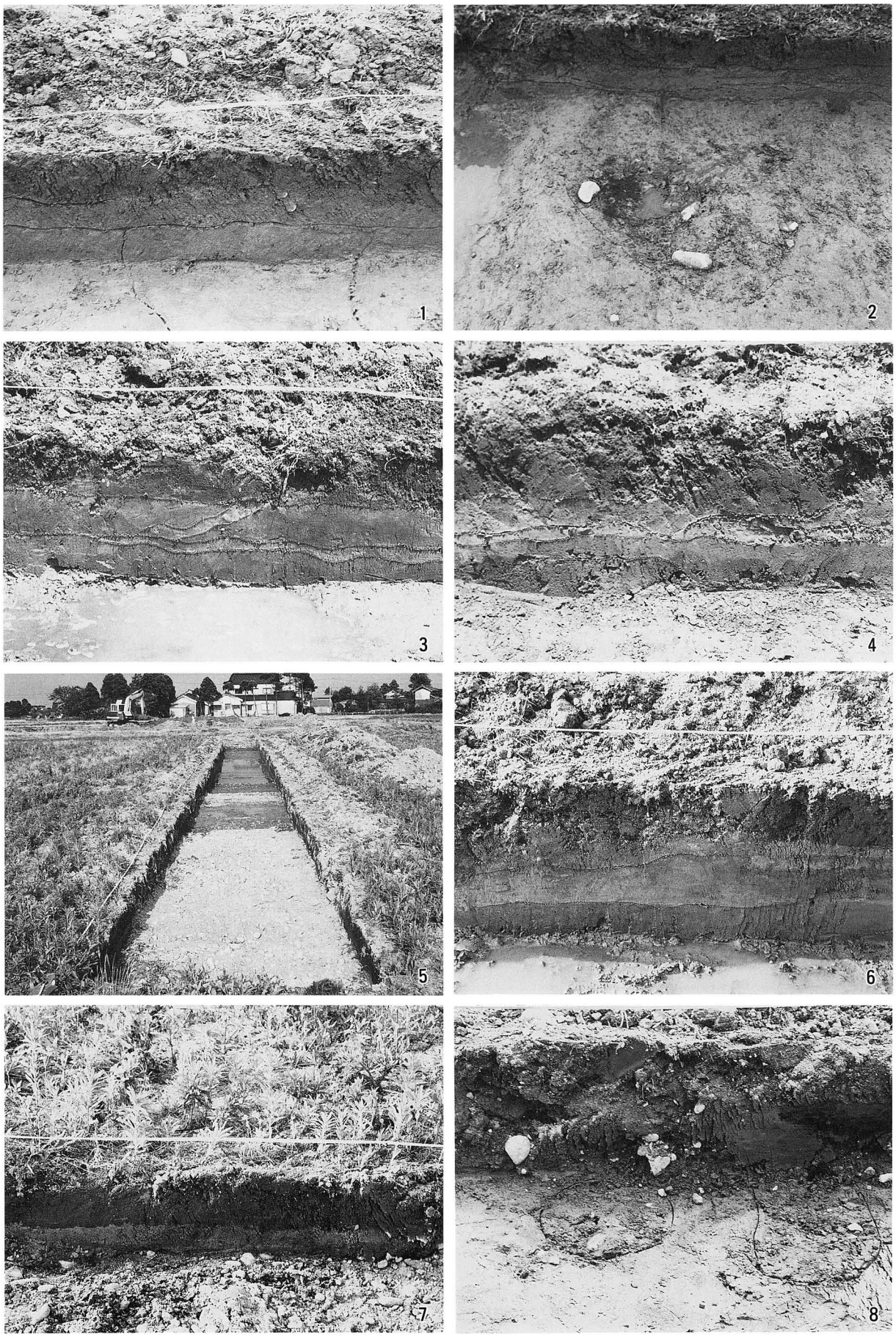


図版５　NEJ-A-03　１．20トレンチ土層　２．22トレンチ土層　３．26トレンチ　４．26トレンチ土層　５．石名田木舟遺跡出土遺物(1/3)

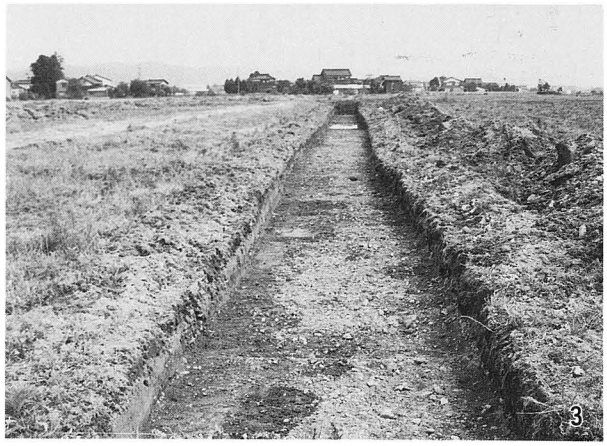
図版6　NEJ-A-04　1．全景(南から)　2．1トレンチ　3．1トレンチ土層　4．11トレンチ　5．11トレンチ土層

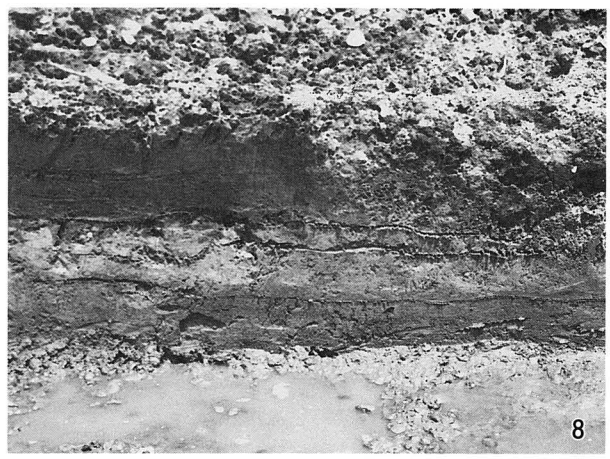


図版７　NEJ-05　１．全景(南から)　２．５トレンチ　３．５トレンチ土層　４．５トレンチ溝　５．７トレンチ石組み井戸

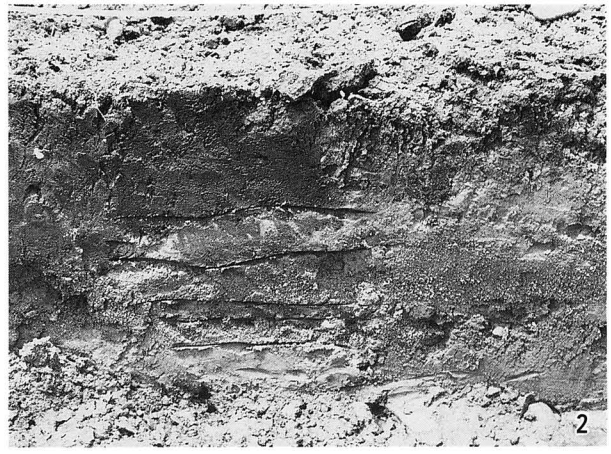


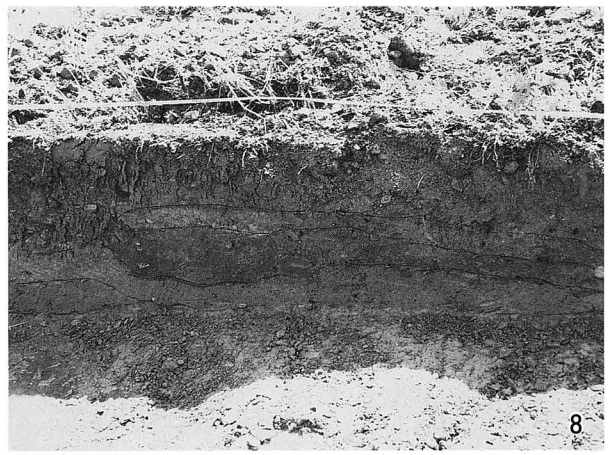
図版８　NEJ-05　１．８トレンチ土層・溝　２．８トレンチ炭化物集中地点　３．９トレンチ土層　４．10トレンチ土層　５．12トレンチ　６．12トレンチ土層　７．12トレンチ土層　８．13トレンチ穴





図版９　NEJ-05　１．13トレンチ穴　２．14トレンチ土坑　３．15トレンチ　４．15トレンチ穴　５．15トレンチ穴
７．20トレンチ土層　８．22トレンチ土層





図版10　NEJ-05　1．22トレンチ噴砂　2．24トレンチ土層　3．25トレンチ土層　4．25トレンチ穴　5．26トレンチ土層　6．30トレンチ穴　7．33トレンチ土層　8．33トレンチ土層